



TITLE:

日本の西方・日本の北方 -古地図が
示す世界認識- 京都大学附属図書館
所蔵室賀コレクション古地図展

AUTHOR(S):

CITATION:

日本の西方・日本の北方 -古地図が示す世界認識- 京都大学附属図書館
所蔵室賀コレクション古地図展. 1998

ISSUE DATE:

1998-10-31

URL:

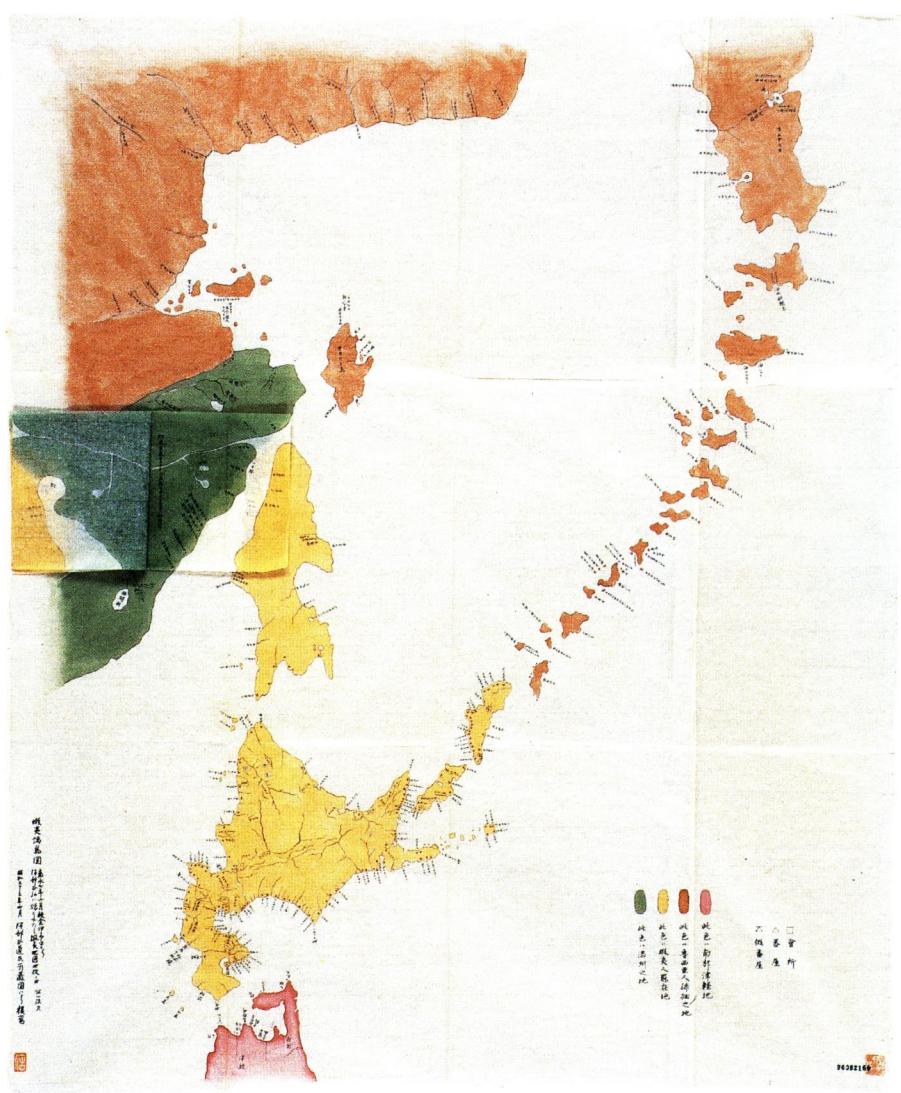
<http://hdl.handle.net/2433/148395>

RIGHT:

日本の西方・日本の北方

— 古地図が示す世界認識 —

京都大学附属図書館所蔵室賀コレクション古地図展

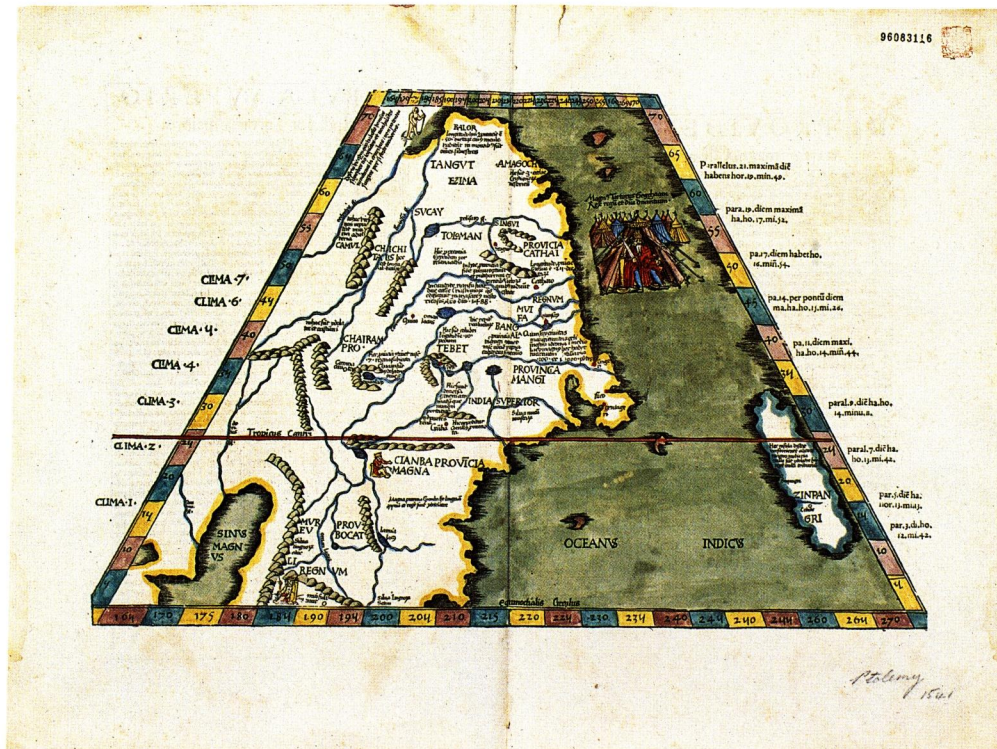


京都大学附属図書館

会期：1998年10月31日～1998年11月15日

会場：京都大学附属図書館展示ホール

表紙：「蝦夷諸島図」室賀信夫筆写



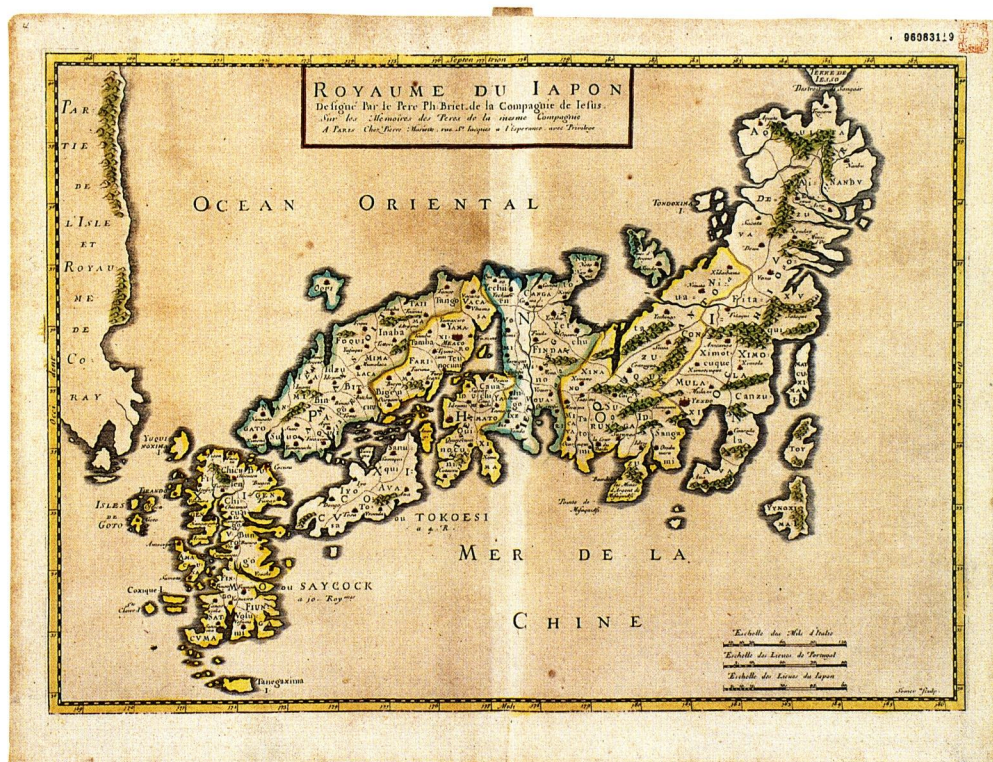
3-1 L. Fries: 'Tabvla Superioris Indiæ et Tartariæ Majoris' (1541)



3-3 A. Ortelius: 'TARTARIAE SIVE MAGNI CHAMI REGNI tÿpus' (1570)



3-5 Guilielmus et Johannes Blaeu: 'CHINA Veteribus SINARVM REGIO nunc Incolis TAME dicta' (1650)



3-6 P. Briet: 'ROYAUME DU IAPON' (c.1650)



5-4 なんせん ぶしゅう 「南瞻部洲之図」 (c.1698)

室賀コレクション古地図展の開催にあたって

京都大学附属図書館が1996年度に受入れた室賀信夫氏旧蔵書（室賀コレクション）の整理がほぼ終り、目録の発行が準備されているのを機に、公開展示会「日本の西方・日本の北方－古地図が示す世界認識－」を開催することになりました。

室賀コレクションは、日本における地図史研究の草分けの一人であり、京都帝国大学助教授（地理学）であった故室賀信夫氏（1907-1982）が、その研究活動において収集された個人コレクションで、古地図と地理学史関係図書が主要部分をなし、とりわけ約1000点におよぶ古地図は、国立歴史博物館および神戸市立博物館所蔵の秋岡コレクションや横浜市立大学所蔵鮎澤コレクションとならぶ貴重なものであります。

今回の展示会は、「古地図が示す世界認識」を主要テーマとし、古地図約50点を精選、「蝦夷地の地理像と新訂万国全図」「ヨーロッパ製アジア・日本図」「マテオリッチ系・蘭学系世界図」「仏教系世界図の展開」「中国系世界図」の5つのテーマに分け、展示・解説しております。さらに「室賀信夫と古地図研究」のコーナーでは、研究ノートや原稿など十数点を展示いたしました。

また、展示会の開催期間内に、人文地理学会の1998年度大会（創立50周年記念）がこの京都の地で開かれます。この機会に、「京都大学大学院文学研究科地理学教室」、「地理学教室と古地図コレクション」、「古地図研究の流れ」についても紹介するコーナーを設けております。

展示会を開催するに当たり、古地図の選定・配置および解説の作成等について、京都大学文学研究科金田章裕教授並びに米家泰作氏（大学院生）には多大なるご尽力を賜り、また、室賀コレクションの受入に当たってご尽力いただいた京都大学総合人間学部松田清教授には、研究ノート等の選択、解説に加えて、記念講演の講師を快くお引き受けいただきました。ここに記して御礼を申し上げます。

1998年10月

京都大学附属図書館長

菊池光造

目 次

室賀コレクション古地図展の開催にあたって	1
日本の西方・日本の北方 ― 古地図が示す世界認識 ―	3
京都大学附属図書館所蔵室賀コレクション古地図展	
1. 室賀信夫と古地図研究	4
2. 蝦夷地の地理像と新訂万国全図	9
3. ヨーロッパ製アジア・日本図	19
4. マテオリッチ系・蘭学系世界図	33
5. 仏教系世界図の展開	43
6. 中国系世界図	53
京都大学大学院文学研究科地理学教室	57
地理学教室と古地図コレクション	57
古地図研究の流れ	58
出展一覧	59
あとがき	60

※解説文末尾の【 】囲み数字は京都大学附属図書館所蔵室賀コレクションの通し番号です。

正誤表

	誤	正
p. 1 8 行目	国立歴史博物館	国立歴史民俗博物館
p. 5 15 行目	contract	contact
p. 27 1 行目	RUSSE	RUSSIE
p. 28 1 行目	daprés	d'après
p. 53 5 行目	声願広被図	声教広被図

日本の西方・日本の北方

— 古地図が示す世界認識 —

京都大学附属図書館所蔵室賀コレクション古地図展

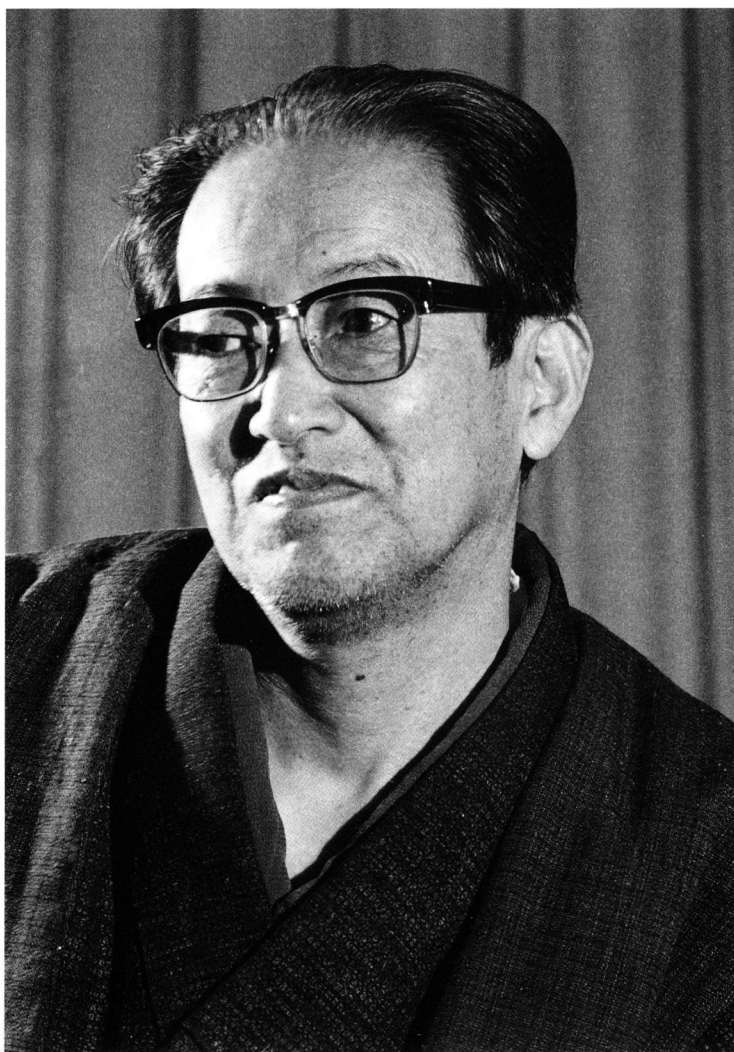
古地図は、それが描かれた時点における地理的情報を表現したものである。ところがその情報は、必ずしも事実であるとは限らず、さまざまな不正確さや誤解・誤認を含んでいる。とりわけ、情報量の少ない古い時代においては、情報源と地図の作製者やそれを使用する人々の認識によって表現が大きく左右されざるを得なかった。

日本における地図史研究の草分けの一人である室賀信夫の主要な関心は、まさにこの点にあった。今回、室賀コレクションの中から、地理的情報の増大・精度の向上に伴う東西の地図の発達過程と、仏教的あるいは伝統的な世界認識の中に、それを懸命に位置付け、理解しようとする動向に関わる古地図を選んで展示をした。日本の伝統的世界観は西方への関心であり、ヨーロッパの地図発達も西方から東洋に及んだ。日本における境域への関心は、当時のヨーロッパ図のフロンティアでもあった日本とその北方において、東西世界の情報が一体化され、新しい成果を生み出す役割を担った。

古地図が示すのは、単なる情報ではなく、それを世界認識の中に位置付けた結果である。展示された古地図は、その時々の世界認識とその変化を顕現し、やがて世界を事実に基づいて把握するに至る過程を示している。その大きなうねりを古地図の中に見出していいただければ幸いである。

1. 室賀信夫と古地図研究

室賀信夫は学生時代から俊才の誉れが高かったが、病弱でしばしば病床につくなど、地理学者として野外調査や見学旅行に出かける自由はほとんど得られず、著作も多いとは言えない。しかし、織田武雄教授の下に提出された学位論文『仏教系世界図の地図学史的研究』をはじめ、優れた洞察力に富む論考が多く、京都大学退職後も「山科大人」として地図学研究者の敬意を集めた。『地理学史研究』の創刊や、すぐれた古地図研究に贈られるイマゴ・ムンディー賞の受賞をはじめ、わが国の地図学史研究の確立に不朽の光を放つ足跡を残した。室賀コレクションは、その研究活動と共に収集された個人コレクションであり、古地図と地理学史関係図書が主要部分をなしている。



室賀信夫氏

略年譜

明治40年（1907）東京府生まれ。

昭和8年（1933）京都帝国大学文学部史学科卒業。

昭和12年（1937）同大学文学部講師。

昭和18年（1943）同大学助教授。

昭和21年（1946）退職。

昭和32年（1957）『地理学史研究』創刊。

昭和36年（1961）文学博士。

昭和42年（1967）東海大学文学部教授。

昭和57年（1982）逝去。享年74。

1-1 研究

1-1-1 「日本に行われた仏教系世界図について」、地理学史研究1、1957。海野一隆と共著。

（文学部図書室）

1-1-2 学位論文『仏教系世界図の地図学史的研究』、1961。（附属図書館、文／195函／1-2）

1-1-3 The Buddhist world map in Japan and its contract with European maps. *Imago Mundi* 16, 1962. 海野一隆と共著。（文学部図書室）

1-1-4 『古地図抄—日本の地図の歩み』、東海大学出版会、1983。（附属図書館ほか）

1-2 編纂本

1-2-1 地理学史研究会編『地理学史研究』、柳原書店、1957年創刊。（文学部図書室）

1-2-2 『日本の古地図』、創元社、1969。南波松太郎・海野一隆と共編。（地理学教室ほか）

1-2-3 『日本古地図大成』、講談社、1972。中村拓監修、海野一隆・織田武雄と共編。

（地理学教室ほか）

1-2-4 『日本古地図大成・世界図編』、講談社、1975。織田武雄・海野一隆と共編。

1-3 室賀コレクション

1-3-1 飛騨地方の歴史地理調査ノート 1冊

昭和6年5月22日京都駅出発より8月22日喀血して倒れるまでのフィールド・ノート。後日、整理して書き直したもの。冒頭に「このノートは小さい私の研究の為に、何よりも大切なものなのです。万一、私がこのノートを紛失した時、これを御拾得なさった方はどうぞ左記宛御送り下さいませ。京都帝国大学文学部地理学研究室 室賀信夫」と書き入れがある。

1-3-2 論文「飛騨国の交通系に就いて ― 二三の歴史地理学的考察 ―」 抜刷

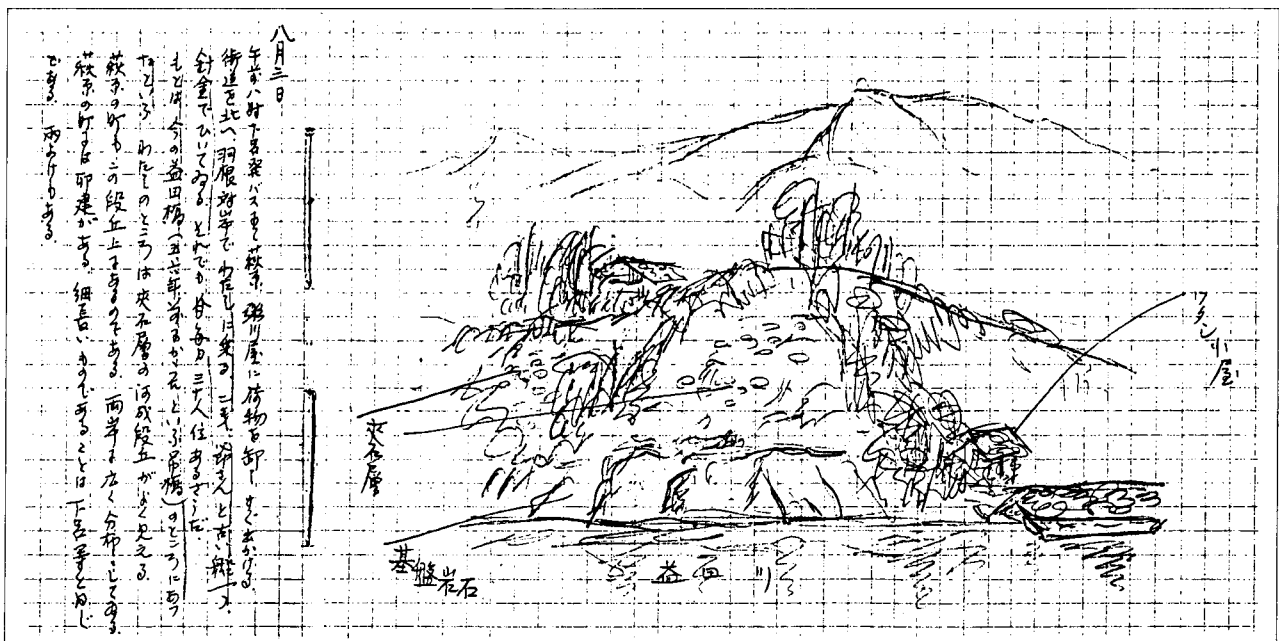
前項のフィールド・ノートにもとづく論文。『地理論叢』第5輯（昭和9年）別刷

1-3-3 論文「並河誠所の五畿内志に就いて」 2冊

儒者並河誠所（1668-1738）の『五畿内志』（『日本輿地通志』享保21成に収録）を「江戸時代中期に於る学問の実証主義的傾向の具体的作品」として、近世の日本地理学史の上意義深いものと結論づけている。『史林』第21巻（昭和11年）第3号および第4号抜刷

1-3-4 論文「章学誠とその方志学」 抜刷

清の儒者章学誠（1738-1801）の方志学について、「方志を全く史学に隷属せしめ、その体例を資料性に於て統一したことにより、従来謂はば散著ともいふべかりし地誌類を一の学問的体系の内に組入れることが出来たのであって、このことは、漠然と歴史的な、或は回顧的なものを多く含んでゐた支那に於る地誌編纂の方法に一の理想、或は目的を与へたものであり、これは章学誠をして東洋地理学史上に卓然たる地位を占めることを許すものである。」と結論づけている。『地理論叢』第7輯（昭和10年）別刷



1-3-1 飛騨地方の歴史地理調査ノートより

1-3-5 草稿「戦争経済遂行上より見たる資源を中心とする研究—英領馬來」 1綴

昭和14年9月、総合地理研究会のために著した論文。用箋は同研究会のもの。

1-3-6 政治地理講義草案 「日本に於ける地政学的思考の展開」 1冊

京都帝国大学文学部における、昭和17年度後期および昭和18年度前期の講義草案。この草案を細字でペン書きした大学ノートの表紙には「郢燕帖」（牽強付会の冊子を意味する）と謙遜した題名が墨書されている。

1-3-7 高等学校制度改正にともなう教授要綱原案草稿 1綴

昭和17年12月、高等学校歴史科の「教授要綱ニ関スル専門委員」の原案起草幹事を第三高等学校教授井上智勇とともに、京都帝国大学講師として命ぜられたときの原案草稿の一部。歴史科の主査は東京帝国大学名誉教授辻善之助。委員には東京帝国大学教授和田清、京都帝国大学教授西田直二郎、原随園、小牧実繁が就任していた。

1-3-8 高等学校高等科臨時教授要綱 文部省専門学務局 昭和17年3月 文部省訓令第7号別冊

1-3-9 草稿「南方圏統治への地政学的試案」 1綴

冒頭欄外に「本篇は昭和通商調査部の委嘱により昭和十六年十月八日、小牧教授まで提出するものなり」とある。



1-3-10 日本地理学史稿 第1草稿 1冊（全3冊のうち）

昭和24年10月4日起筆。病魔とたたかいつつ本稿を草した心境が冒頭に以下の如く朱書されている。「この日本地理学史稿は、日本地理学史を概観すべき書、小冊子の如きものを除きては全くなきにより、敢てそれをつくらんと試みて、まづものしたる草稿なり。されば人に見すべきにもあらず、我が心覚えまでに記しておくものにして、本文の冗長なる註の煩些なる、みなこの意より出たり。一応かゝる形にて全篇を書き上げ、更にこれを取捨補訂して成稿を得んと欲す。ことに病臥の身にて自身のもてる書さへ自由に参照する能はず、たゞ身辺数冊の書をアトランダムに取上げて書綴るものなれば、孫引も多く欠けたるはなほ多し。稍病おこたる日を待ちて更に添削をかへざるべからず。註記の書の權威なきも名著も、今人の雑著も古典も、玉石混淆して記せしも亦已むを得ざるに出づるのみならず、一つには他日にそなへる自己のメモたる意味なればなり。

かゝること記すにも及ばぬことなれど、病身、命の旦夕を知りがたく、我が亡きのち人の見むこともあらんかと書きおくこと、かくの如し。非力もとより独創の見をたてがたしといへども、衆説をあつめ、うちにまゝ自己の考へを書き記せしところもあり。人のもし採るところとなりて聊か斯学に寄与するところありとせば、身亡ぶとも幸ひこれに如くものあらむや。時に昭和二十四年季秋、山科の草堂に於いて 信識す」

第1章「神話的国土」の第1節「葦原中国」は昭和22年2月から3月にかけての草稿を改修したものの。第1草稿につづいて、第2草稿ともいふべき「日本地理学史稿 一」が昭和27年10月にまとめられている。

1-3-11 日本地理学史稿 第3草稿 第1冊（全4冊のうち）

各冊の成立時期は、第1冊（第一編黎明期の地理思想、第一章神話的世界、第二章国土の認識）昭和28年3月、第2冊（第三章世界への目覚め）昭和29年5月、第3冊（別註第一冊）昭和28年3月、第4冊（別註第二冊）昭和29年3月である。

1-3-12 仏教系世界図資料 1冊

ルーズ・リーフ型ノート。ペン書き。室賀図、法隆寺所蔵図、鮎沢図、安土図、高野山、宝松院、知恩院、各所蔵図など仏教系世界図19図に関する研究ノート。鮎沢図は室賀先生が博士号授与を記念して地理学史の同学鮎沢信太郎氏より贈られた「天竺絵図」（展示番号5-2参照）である。

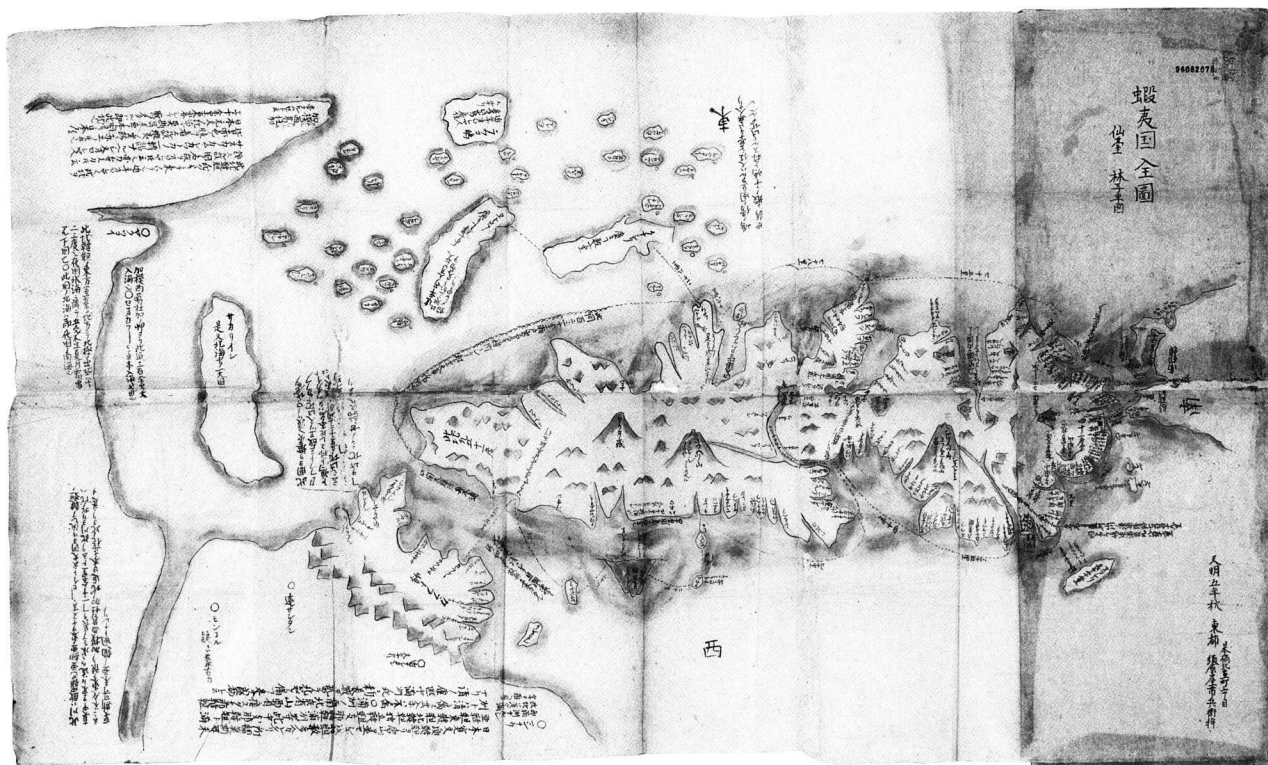
1-3-13 カルロス・サンス書簡 1通

スペイン地理学史の権威 Carlos Sanz より室賀信夫先生あて1964年8月25日付。論文「The Buddhist World Map in Japan」を激賞している。

2. 蝦夷地の地理像と新訂万国全図

1730年代に帝政ロシアの東方フロンティアがオホーツク海に及ぶと、わが国でも国防意識の高揚を伴いつつ蝦夷地への関心が高まった。天明6年（1786）には林子平の『三国通覧図説』が著され、その前年には幕府は蝦夷地の調査と北辺境域の確定作業を開始した。

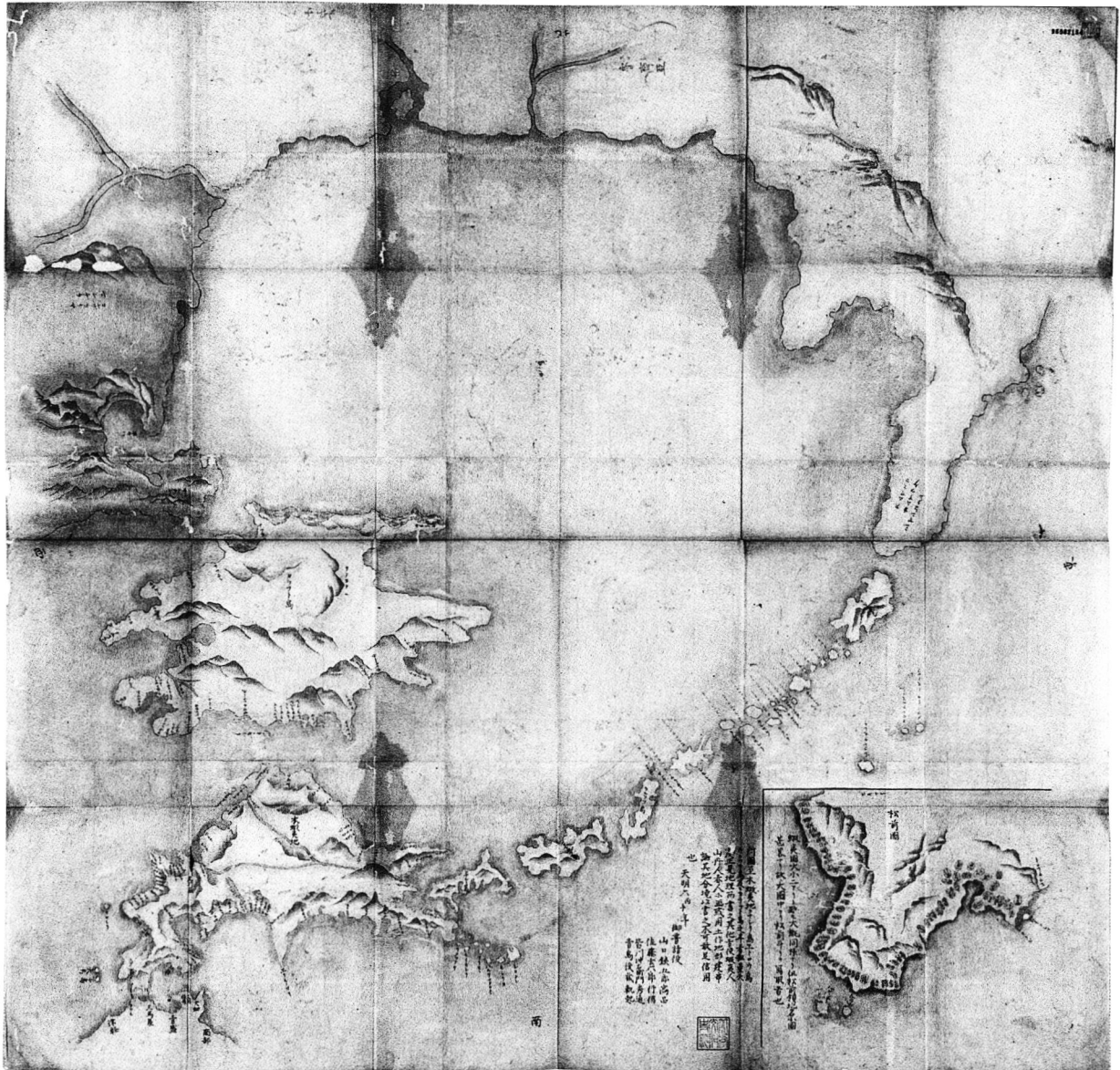
蝦夷地一帯は、当時のヨーロッパ諸国の探検航海からも取り残されていた部分であり、文化5年（1808）の間宮林蔵による間宮海峡の発見は、当時の世界地図の空白を埋める主要な足跡であった。幕府天文方の高橋景保は、これらおよび伊能忠敬の日本列島沿海測量の成果と英国アロースミス刊の世界図を融合し、当時世界最新の世界図を完成した。しかし、その間のシーボルトとの情報交換が幕府に密告されるに及び、シーボルトの国外退去と高橋景保の獄死へと暗転した。



2-1 林子平「蝦夷国全図」天明5年（1785）写本

手写本・手彩色。55 × 92 cm。

本図は、天明5年（1785）に江戸の須原屋市兵衛によって板行された林子平の「蝦夷国全図」を筆写したものである。林子平（1738-93）は、『三国通覧図説』や『海国兵談』を著し、ロシアの脅威や蝦夷地の開拓を説いたことで知られる。本図は、板行された最初の蝦夷専門図として影響力をもち、盛んに筆写されたが、その地理像はさまざまな点で実像と乖離している。南北に長く延びた北海道本島、大陸からの半島として表現されたカラフト島、カラフトとは別の島として描かれた「サガリイン」が、その特徴である。これは、既に存在していた松前藩作製の諸図だけでなく、オホーツク海北部の注記に「ゼオカラヒ」云々とあるようにオランダの地理書をも参照し、諸情報を融合させた結果であったと考えられる。【5-7】

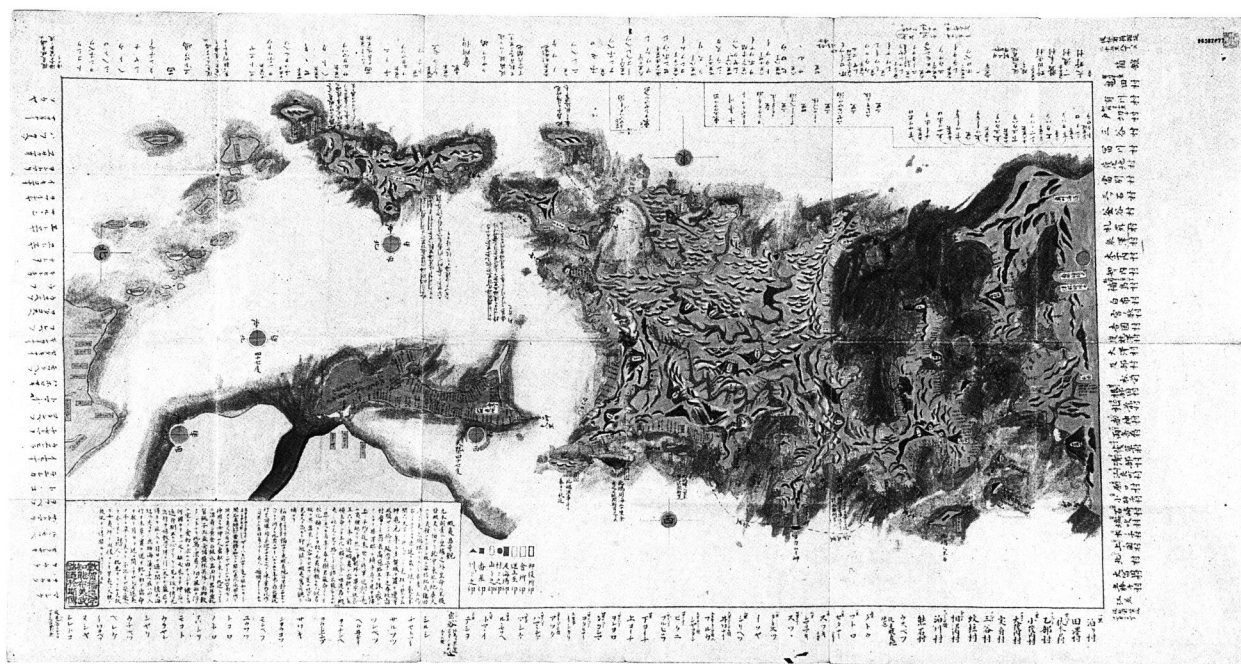


2-2 山口鉄五郎ほか「蝦夷図」天明6年（1786）

手写本・手彩色。101 × 96 cm。

天明5年（1785）2月、田沼意次を老中とする幕府は、御普請役・山口鉄五郎以下10名を蝦夷地調査に派遣した。本図はこの調査隊によってもたらされた絵図である。本図に名は記されていないが、最上徳内も助手として調査隊に参加していた。

本図は、前年に板行された林子平図に比べてかなり正確に諸島の位置関係を捉えており、千島列島や一島として描かれたカラフト島の形状は、当時としては優れたものである。もっとも、調査隊の足跡の及ばなかったカラフト北部や千島列島ウルップ島以北については、「蝦夷人・山丹人・赤人」の描くところに従ったと述べている。【5-34】

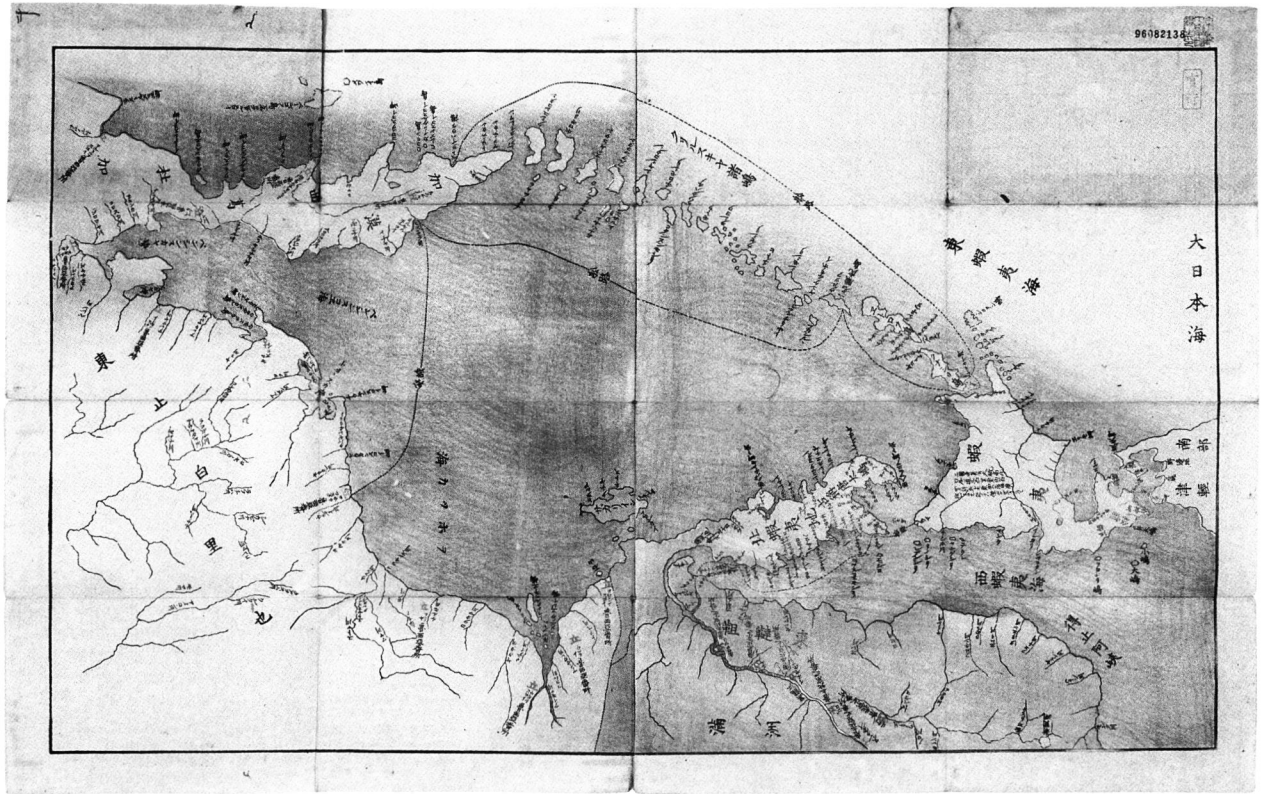


2-3 「蝦夷国図 間宮林蔵検地製造」

手写本・手彩色。70 × 135 cm。

間宮林蔵（1775-1844）は、寛政12年（1800）に蝦夷地御用雇となり、享和3年（1803）に蝦夷地を測量、文化5年（1808）にはカラフト島に派遣されて間宮海峡を確認したことで知られる。

本図の表紙題箋は「間宮林蔵検地製造」と称しており、一島として表現されたカラフト島の形状や、サガリイン島の消滅、地名表示の面で間宮林蔵の調査成果を反映していると推測される。しかし、北海道本島の形状や「蝦夷地奇観」と題する解説には、とくに間宮林蔵の探険に触れるところが無い。本図の作製に間宮林蔵が直接関与したかどうかは不明であるが、間宮林蔵の探険以後流布した様々な蝦夷図のうちの一つであると考えてよいだろう。【5-6】

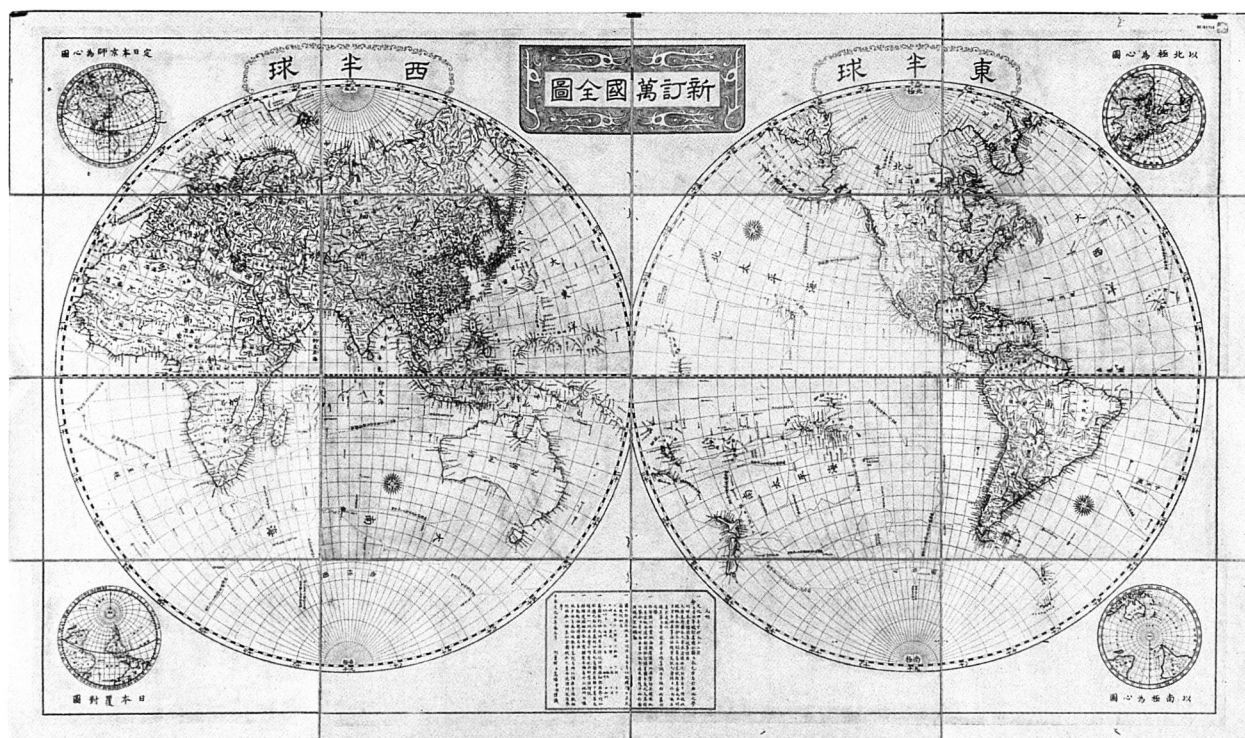


2-4 「北蝦夷地図」

木版・色刷。44 × 71 cm。

本図は、作者・作製年ともに不明であるが、日本北方の地理的な諸情報が様々に融合している点で、間宮林蔵や高橋景保の時代の蝦夷の地域像の特色がよく表れている。とりわけ、カラフトが大陸からの半島として表現され、さらにサガリイン島を描いている点で、本図は林子平図を継承し、間宮海峡を否定している。しかしながら、北海道島や千島列島の形状、また北蝦夷地（カラフト）やオホーツク海沿岸の地名の詳細さは、間宮林蔵らの北方探検の成果や、同時代のヨーロッパ製アジア図を踏まえていることを窺わせている。また、朱字で「立」とあるのは、ロシア・中国の「番所」を示している。

【5-21】

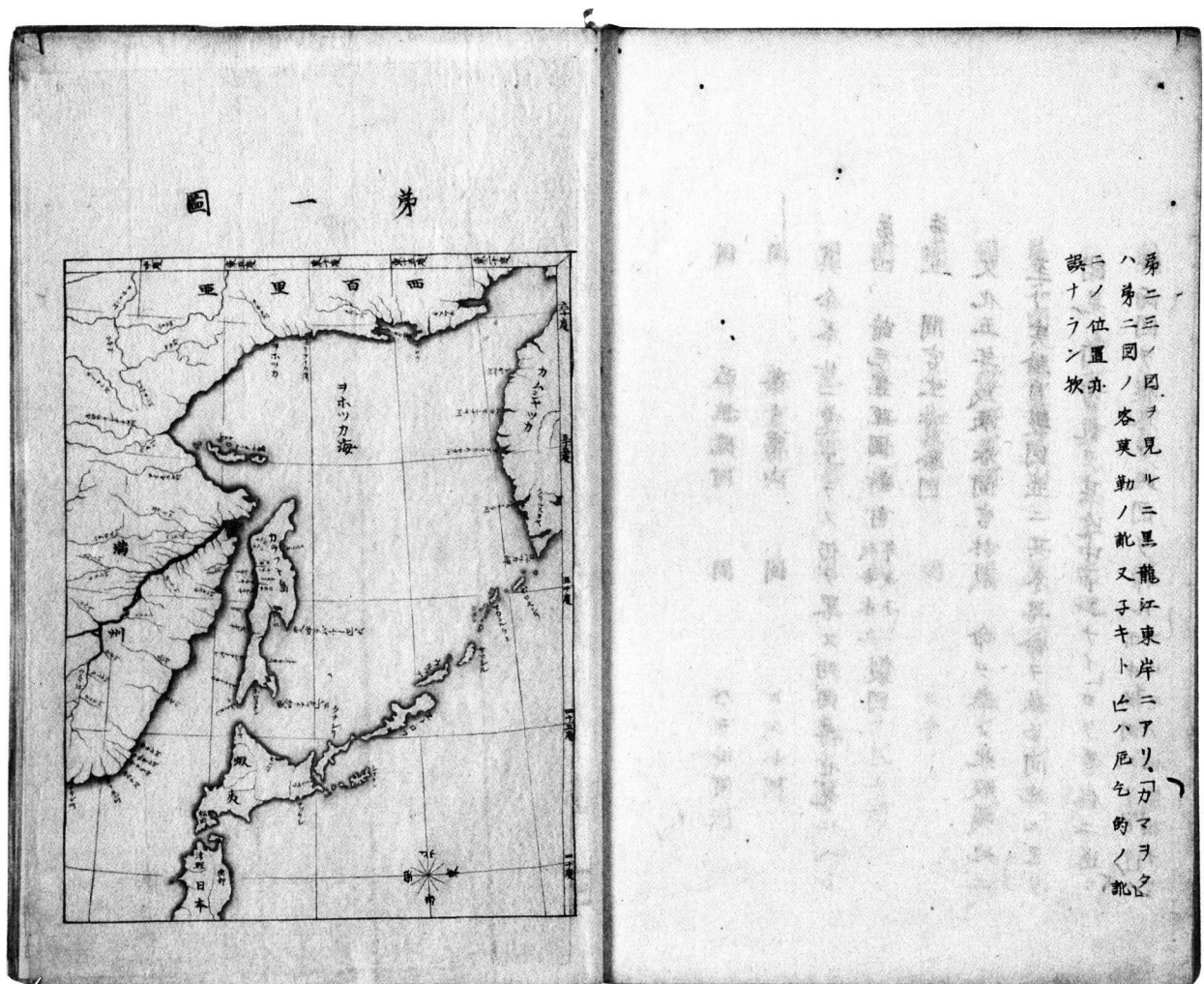


2-5 高橋景保「新訂万国全図」 文化7年（1810）

銅版・手彩色。198 × 115 cm。

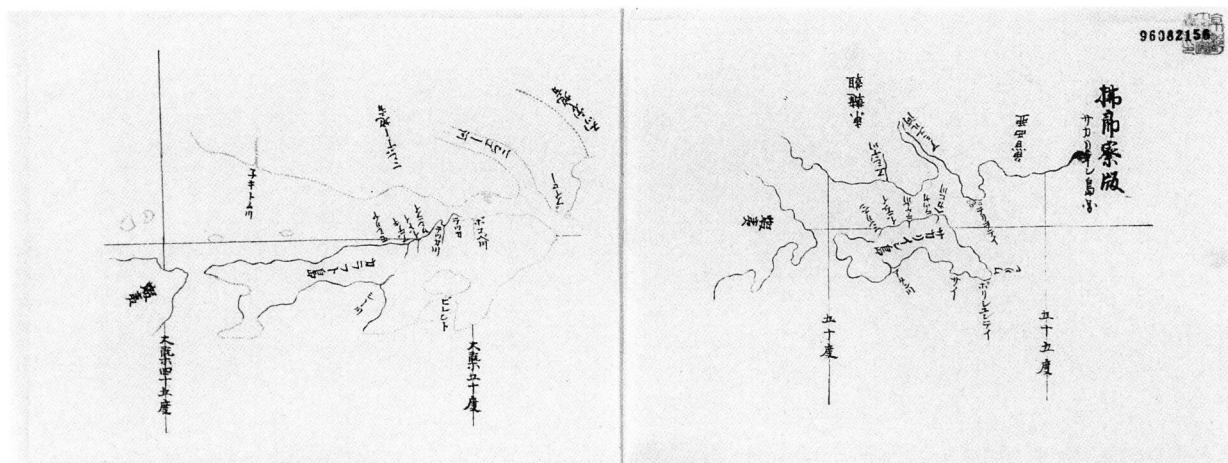
高橋景保（1785-1829）は父・至時を継いで幕府天文方を勤めた。天文学者・蘭学者・地理学者として活躍し、伊能忠敬の測量作業を監督したことや、シーボルト事件によって獄死を遂げたことが、知られている。

本図は、幕府の命によって3年がかりで完成された大型の世界図である。銅版の世界図は、すでに司馬江漢によって作製されていたが、本図は横幅2 mに近いサイズと、当時最新のアロースミス図を基図とし、間宮林蔵による間宮海峡の確認が直ちに地図化されている点、日本列島の形状が伊能による測量によって正確になっている点などが評価される。なお図の4隅には、北極・南極・京都および京都の対蹠点を中心とした半球図が付せられている。【2-17】



2-6 高橋景保『北夷考証』所載 校定図 文化6年（1809）

本書は、高橋景保によって著されたカラフトの地理像に関する著作である。カラフトとその周辺地域にかかわる中国・ヨーロッパ製地図、および間宮林蔵による地図を比較検討し、カラフトが独立した島であることを述べている。【室賀コレクション外】

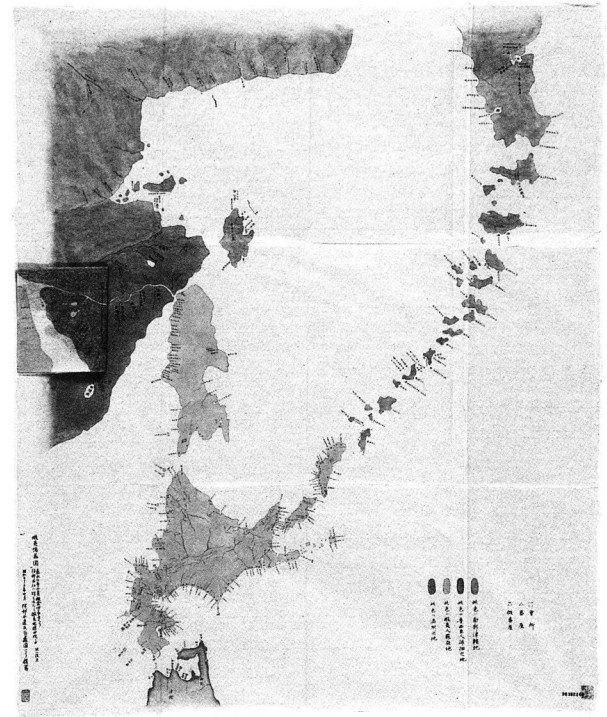
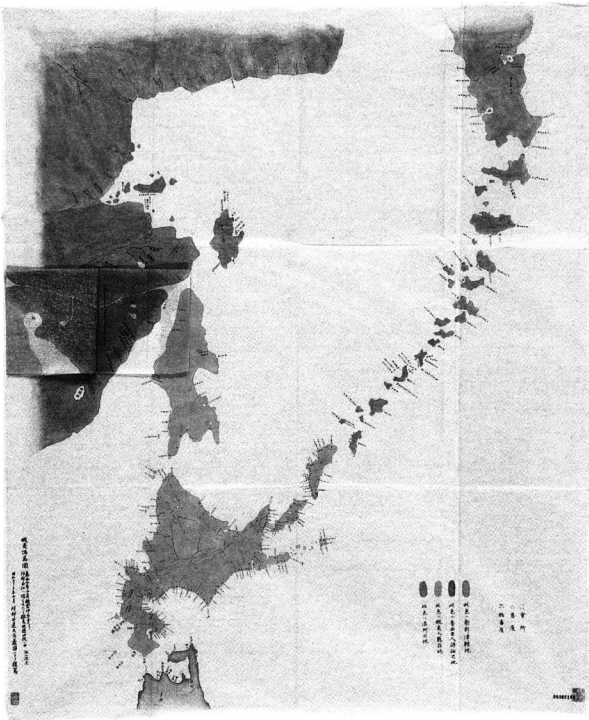
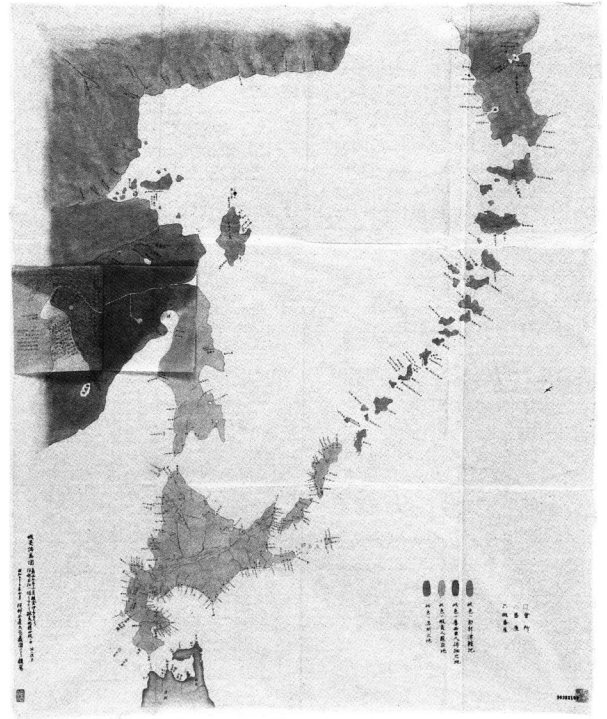
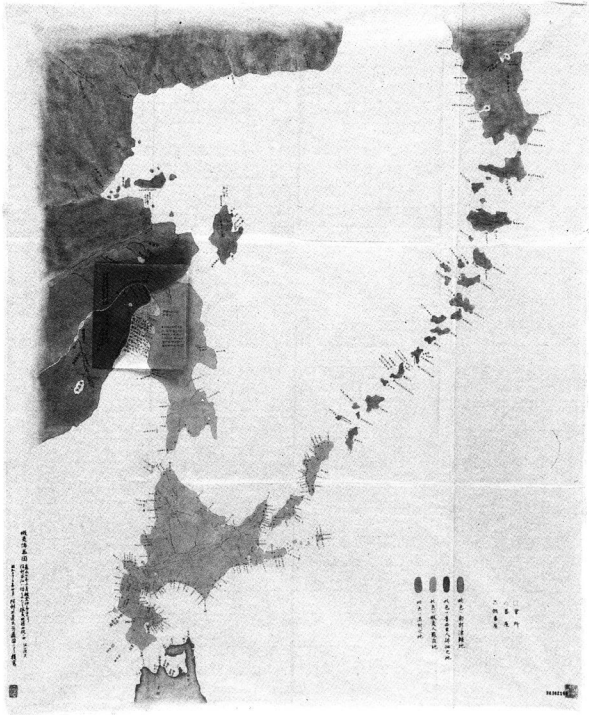


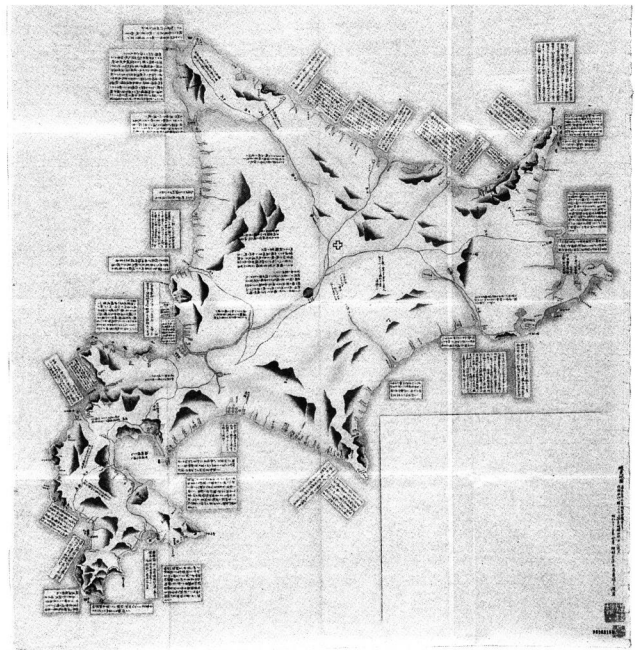
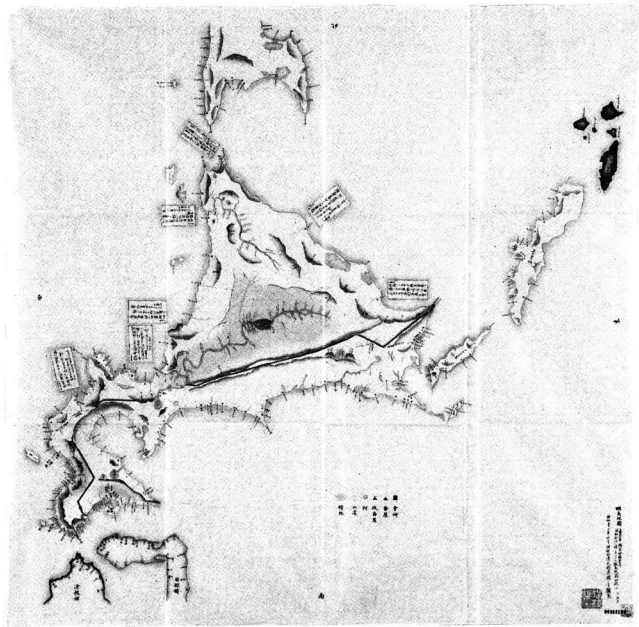
2-7 「間宮林蔵カラフト図写」

筆写。28 × 76 cm。

本図の原図は文化8年（1811）の間宮林蔵『北夷分界余話』所載の地図であり、室賀信夫が自ら筆写したものであろうか。間宮林蔵はこの前年に、大縮尺のカラフト図「北蝦夷島地図」（内閣文庫蔵）を幕府に提出しており、その内容を小縮尺で提示したものが本図である。

カラフト島の形状や緯度の表示は、伊能忠敬に測量技術を習った間宮林蔵自身の測量結果を踏まえており、かなり正確なものとなっている。また地名が、カラフト島西岸、東岸南部、およびアムール川河口に詳細に記されている。ただし東岸北部に地名が見られないのは、林蔵を案内した現地人が、案内を拒んだためであるとされる。【5-36】





2-8, 2-9, 2-10 「蝦夷諸島図」

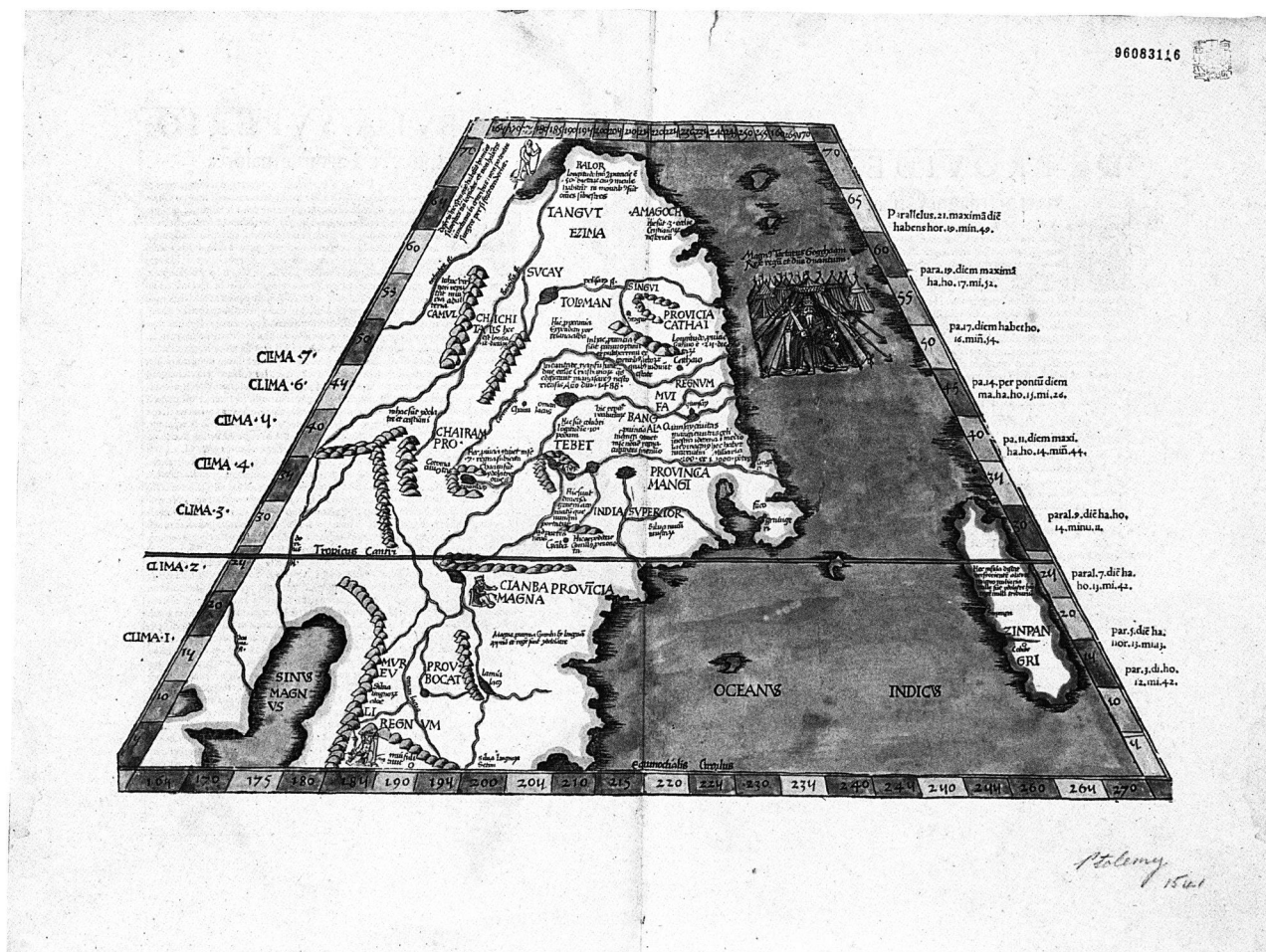
手写本・手彩色。3面。92 × 76 cm, 84 × 81 cm, 83 × 93 cm。

本図の原図は、嘉永7年6月(1854)に板倉伊予守より阿部正弘(1819-57)に贈られた北海道図であり、室賀と地理学教室同窓の阿部正道氏(阿部正弘の子孫)が所蔵する。これを昭和33年に室賀自身が筆写したものである。

阿部正弘は、嘉永7年(安政元年)3月に幕府の老中として日米和親条約に調印しており、本図はその3ヶ月後に贈られた図ということになる。興味深いのは3面のうちの1枚の間宮海峡に重ねられた貼紙である。それらは、間宮海峡が無いとした場合、有るとした場合を示しており、間宮海峡に関する諸説を説明する役割を果たしている。また、黄色で蝦夷地を示し、茶色でロシア人「徘徊」の地を表現している点では、この時代の領土意識を窺うことができる。【5-37】

3. ヨーロッパ製アジア・日本図

ヨーロッパ人に伝えられた伝説的な島ジパングが、アジア図の中にその位置が示されるようになるのは、16世紀初めごろのことであった。当時の地理的情報のフロンティアの一つが、東アジアであった。以来、情報源や地図作製者の認識によって、日本の位置や形状は、さまざまに変化した。有名なオルテリウスの地図帳の1595年版に収められたルイス・テイシェラの日本図に至るまで、日本の形状はずいぶん奇妙な姿をしていた。室賀信夫はこれをメルカトル型、オーメン型、ヴェリエ型、ドゥラード型の四種類に分け、特に1554年ロポ・オーメン作製図に注目した。ポルトガル人は早くから、日本が大陸に接続しているのではないかと考えていたようであり、オーメン型の日本がその証拠となると考えた。

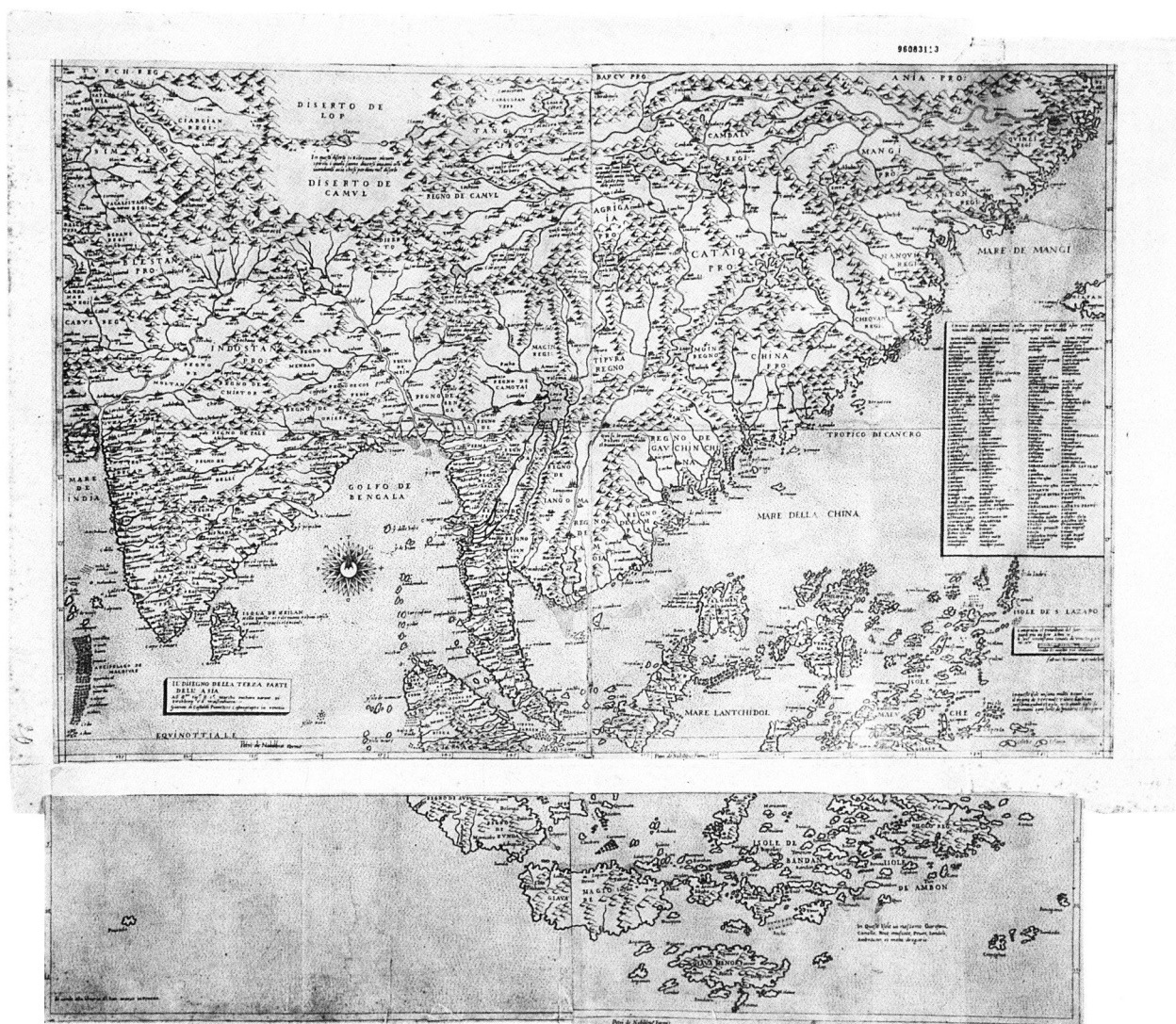


3-1 L. Fries: 'Tabvla Svperioris Indiæe et Tartariæ Majoris' (1541)

木版・手彩色。55 × 41 cm。

本図は、ヨーロッパ人が日本に渡来する直前の時期の東アジア像・日本像を示すものとして興味深い。経緯度による台形状の枠組は、2世紀のプトレマイオスの地理学を継承し、その修正作業を盛んに行ったルネサンス地図学の特色である。

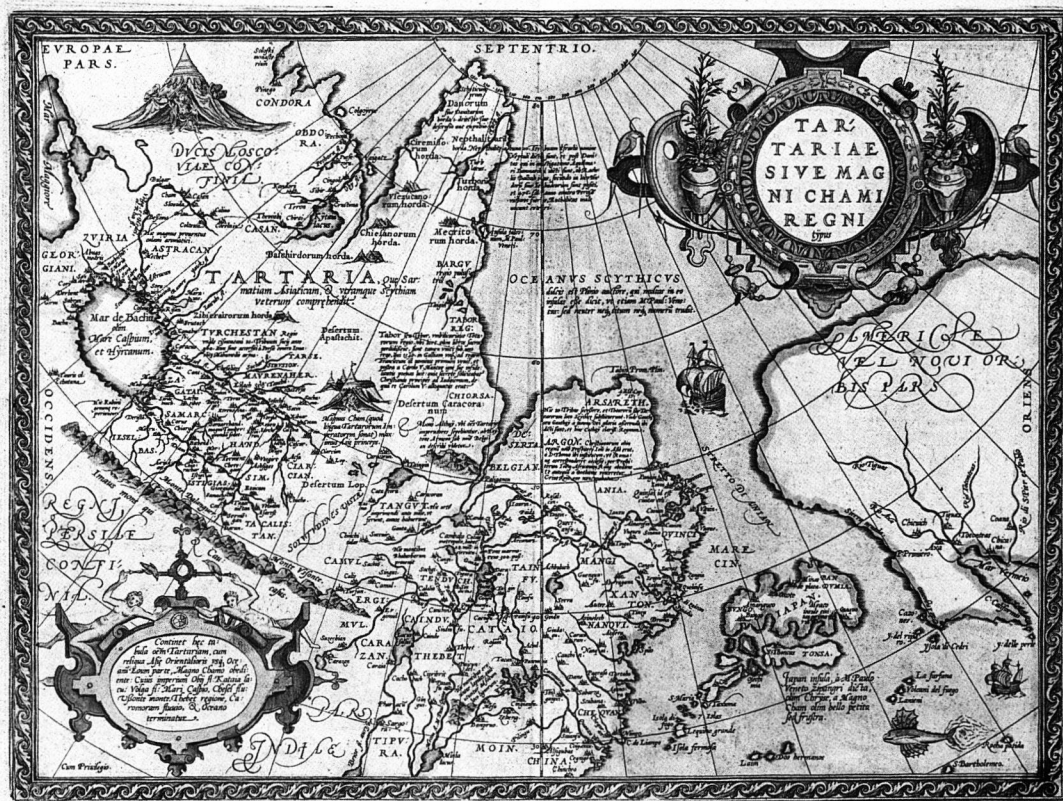
本図は、L. Friesが刊行した『プトレマイオス地理学』（1522初版、ウィーン）に所載された「インド・タルタリア（^{だたん}韃靼）図」であり、CATHAI（カタイ＝中国）を中心とする東アジアを表現している。典型的なプトレマイオス図であるが、描かれた内容には、マルコ・ポーロの記述に基づいて描かれたマルティン・ベハイムの地球儀の影響が認められる。右下に描かれたZINPANGRI（ジパング）は、北緯10～30度という南方に位置する南北に細長い一島として表現されている。そこには北回帰線が通過し、また架空の2都市が示されている。【11-13】



3-2 Giacomo di Gastaldi: 'IL DISEGNO DELLA TERZA PARTE DELL' ASIA' (1561)

銅版。80 × 70 cm。

天文11年（1543）にポルトガル人が種子島に漂着して以来、ヨーロッパ製の地図のなかの日本は、しだいに日本から伝えられた知識や絵図を材料として描かれるようになる。本図は、16世紀イタリアの地図学・地理学者であり、「メルカトルとオルテリウス以前の最も優秀な地図家」とも評されるジャコモ・ガスタルディによって作製された「アジア第3図」である。本図の右端には、Giapan（日本）の西南部のみ描かれ、ポルトガル人の最初の日本渡航地方であるCangoshima（鹿児島）が記されている。ここでは、九州・四国・本州の区別は認められず、なお日本が一つの島として捉えられていたことが窺える。【11-10】



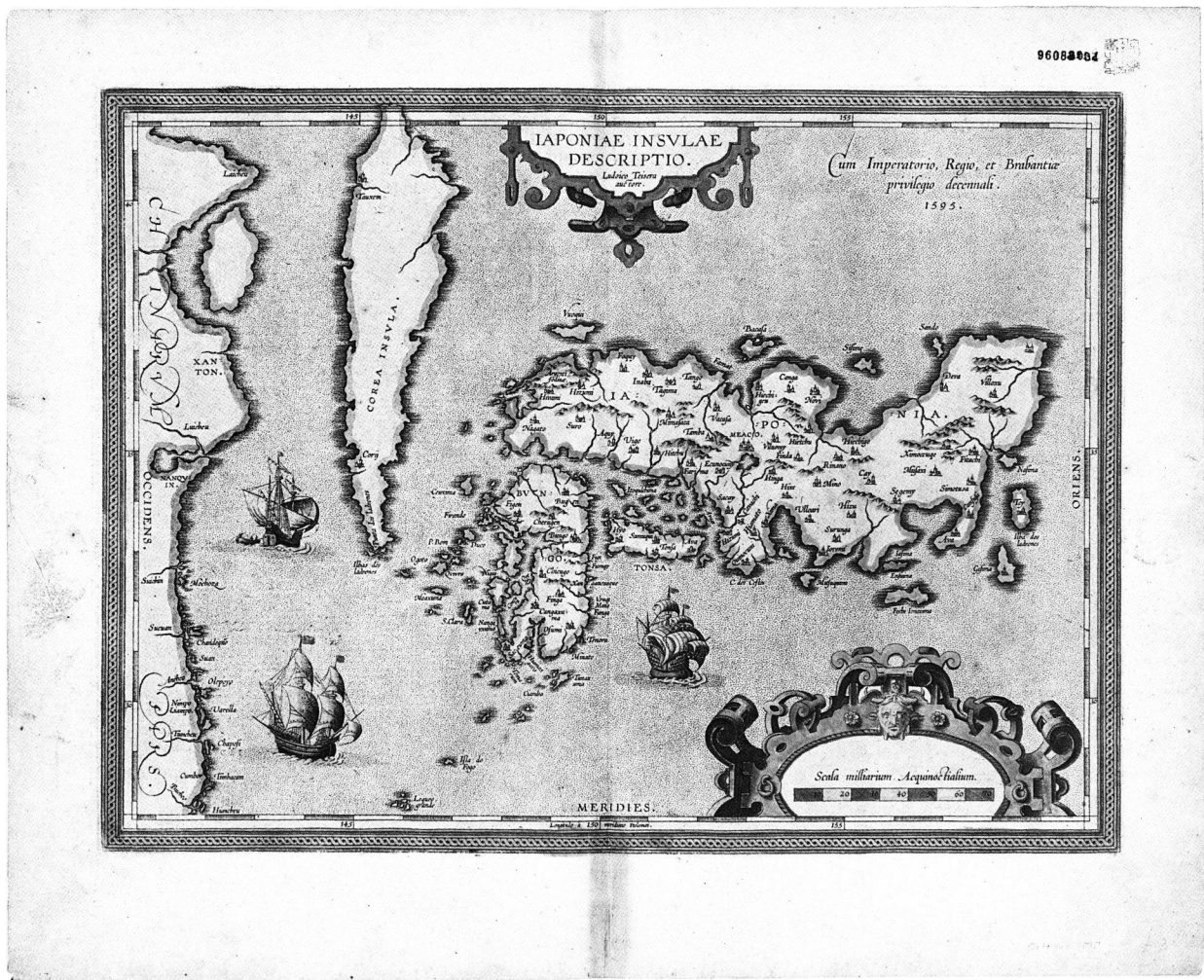
3-3 A. Ortelius: 'TARTARIAE SIVE MAGNI CHAMI REGNI tÿpus' (1570)

銅版・手彩色。55 × 46 cm。

16世紀中期～17世紀中期の1世紀の間、ヨーロッパの地図学の中心は、メルカトルと本図の刊行者オルテリウスに代表されるフランドル地方にあった。本図は、アントワープのオルテリウスの世界地図帳『世界の舞台』(1570年刊)に載せられた「タルタリアまたは大汗国図」である。

日本の形態は、一島としてでなく、本州・四国・九州らしき島々の集まりとして描かれており、前掲のガスタルディ図に比較して書き込まれた地名が増加している。しかし、九州が分裂していること、朝鮮半島や山東半島が無いこと、北海道が無く、アジアとアメリカを隔てる架空のアニアン海峡(Stretto di Anian)が描かれていることなどをみれば、海岸線の多くが依然として想像によって描かれていることが窺える。

なお本図は、1963年にマドリードのCarlos Sanzより室賀信夫に贈られたものである。【11-11】

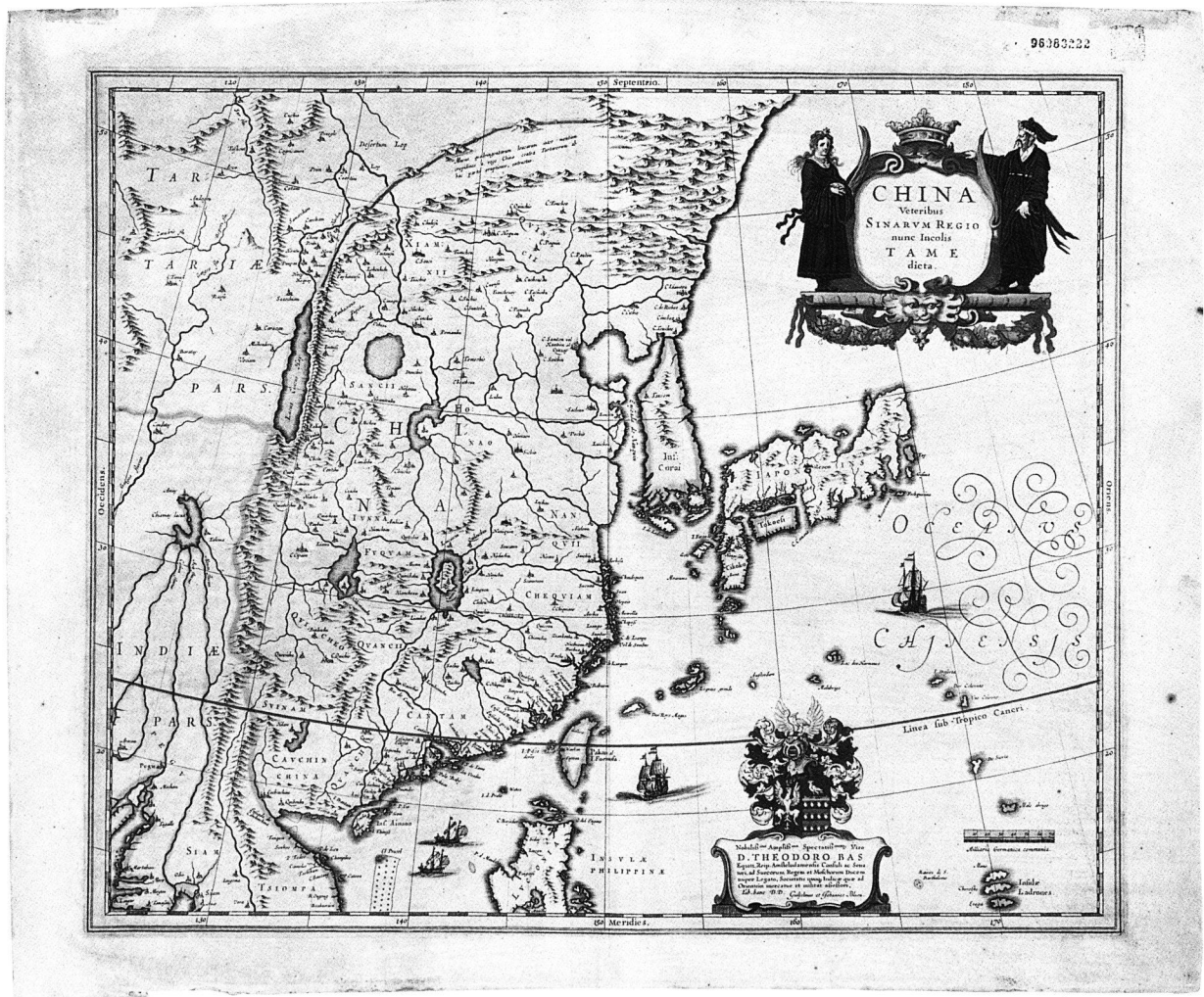


3-4 L. Teisera: 'IAPONIAE INSVLAE DESCRIPTIO' (1595)

銅版・手彩色。56 × 45 cm。

オルテリウス『世界の舞台』は好評をもって迎えられ、その後再版・増補版が繰り返し販売された。本図は1595年の増補版において付加された「日本諸島図」であり、刊行地図帳としては最初の日本専門図だといわれる。作者のルイス・テイシェラはポルトガルの地図作製者であり、本図をオルテリウスに提供した。その原図がいかなるものであったかは諸説あるが、日本からポルトガルに伝えられた日本製の地図が参照されたことが考えられる。

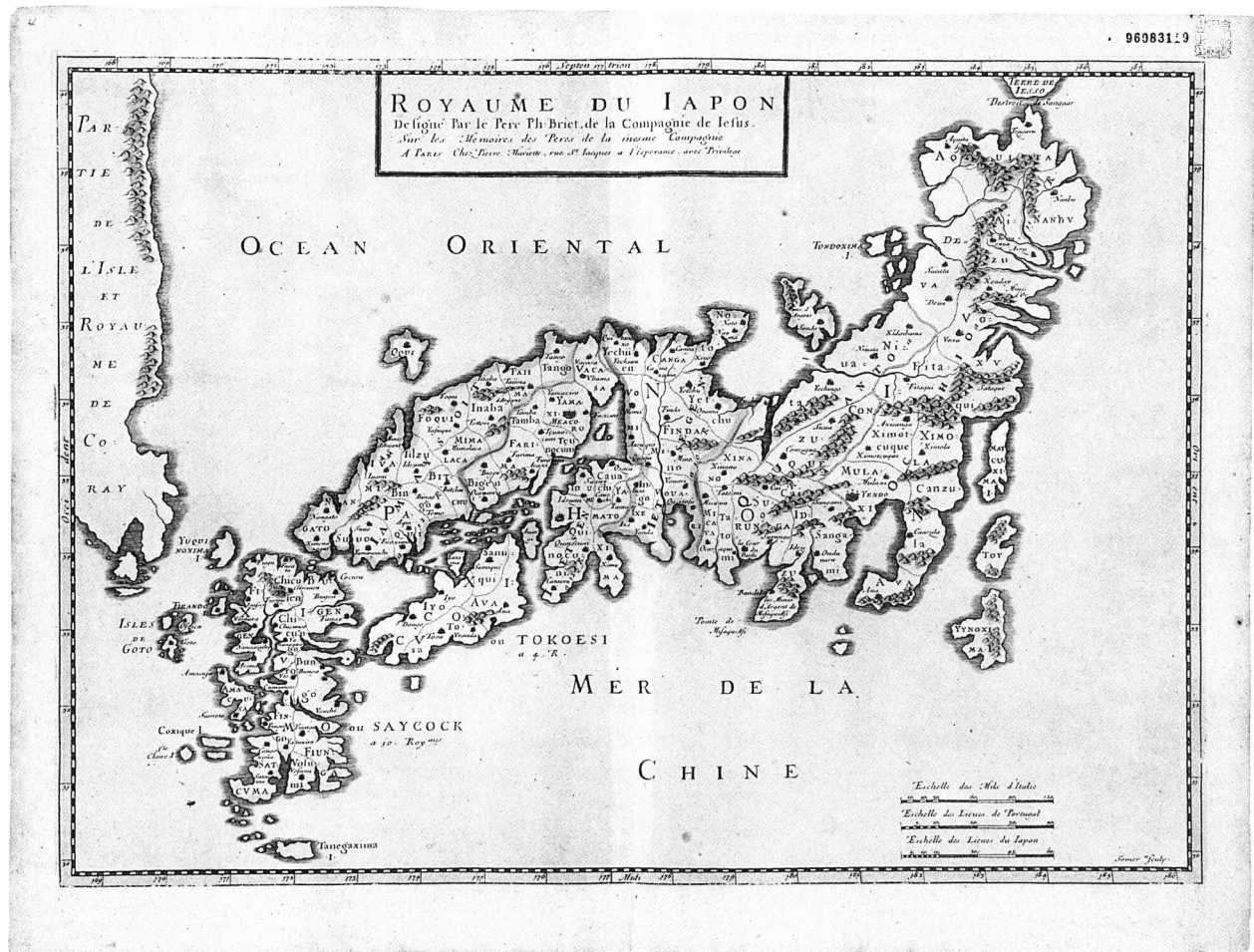
北海道を欠くものの、日本列島の諸島の位置関係は比較的正しく表現され、また記載された多くの地名が、誤りを含むものの、中国式でなく日本の発音で示されているところに特徴を見いだすことができる。とりわけ国の名が多く記載され、また宣教師に関わる地名がみられる。【11-1】



3-5 Guiljelmus et Johannes Blaeu: 'CHINA Veteribus SINARVM REGIO nunc Incolis TAME dicta' (1650)

銅版・手彩色。58 × 48 cm。

オルテリウスとメルカトルに続く17世紀の世界地図帳発刊者として知られるのが、本図「中国近域図」に名を記したウィレム・ブラウとその子ヨアン・ブラウである。この親子はアムステルダムに本拠地を置き、1662年には代表作となる『世界地図』12巻を刊行した。本図はそれ以前に作製されたもので、島としての朝鮮半島や、北海道の欠如を特色としている。なお、テイシェラ図に似て、日本の東部には架空の島がある。これらの島々は、1643年のフリースによる日本近海の探険の成果がヨーロッパにもたらされた後、ヨーロッパ製の地図からは消滅していった。【11-36】

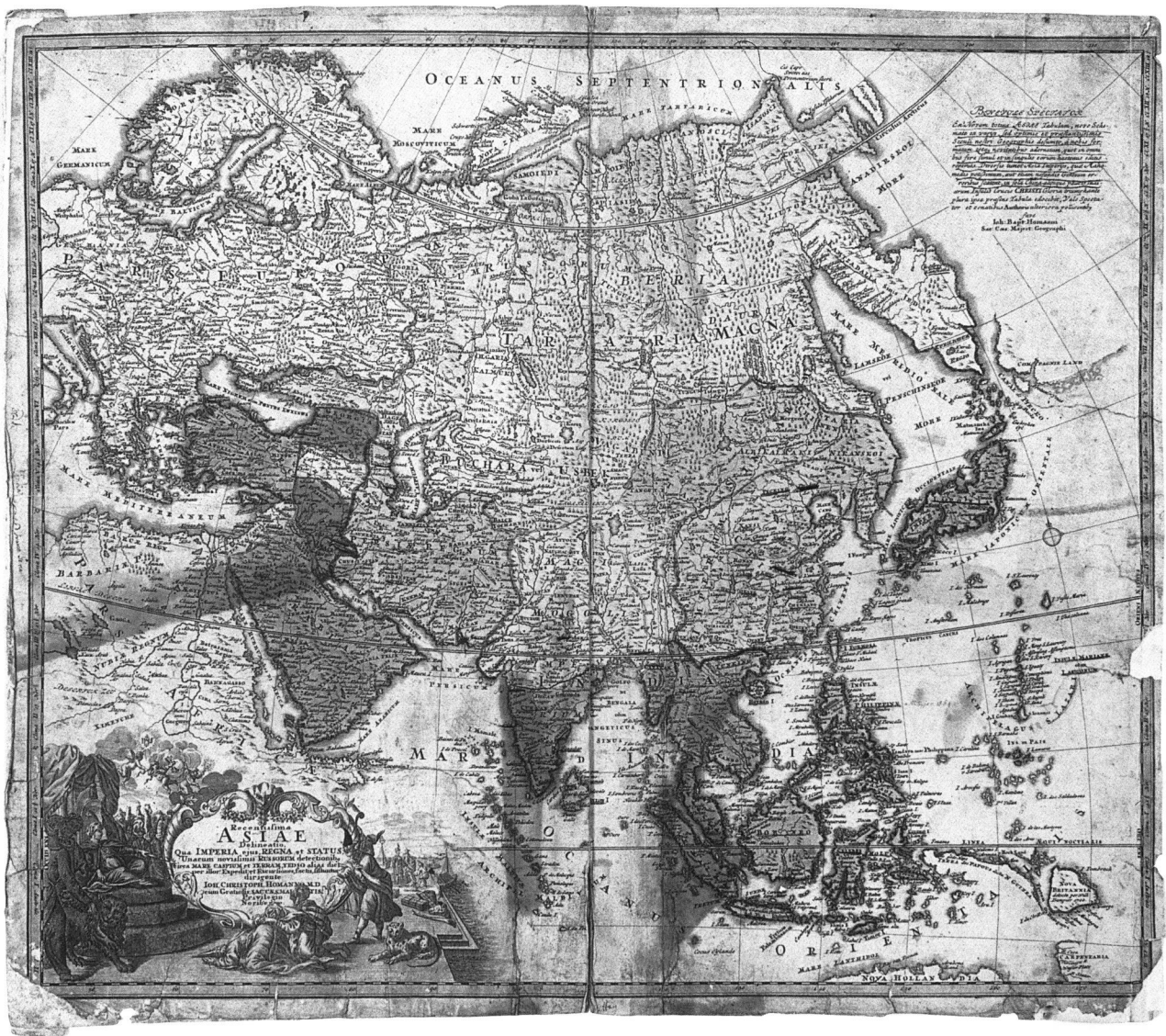


3-6 P. Briet: 'ROYAUME DU IAPON' (c.1650)

銅版・手彩色。57 × 43 cm。

テイシェラの日本図の約半世紀後の「日本図」である。フランスの宣教師ブリエによってフランスの Pierre Mariette から刊行された。本図には、日本内部の国境が描かれているほか、YENDO, OZACA などの地名がみえ、IESSO が姿を見せている。

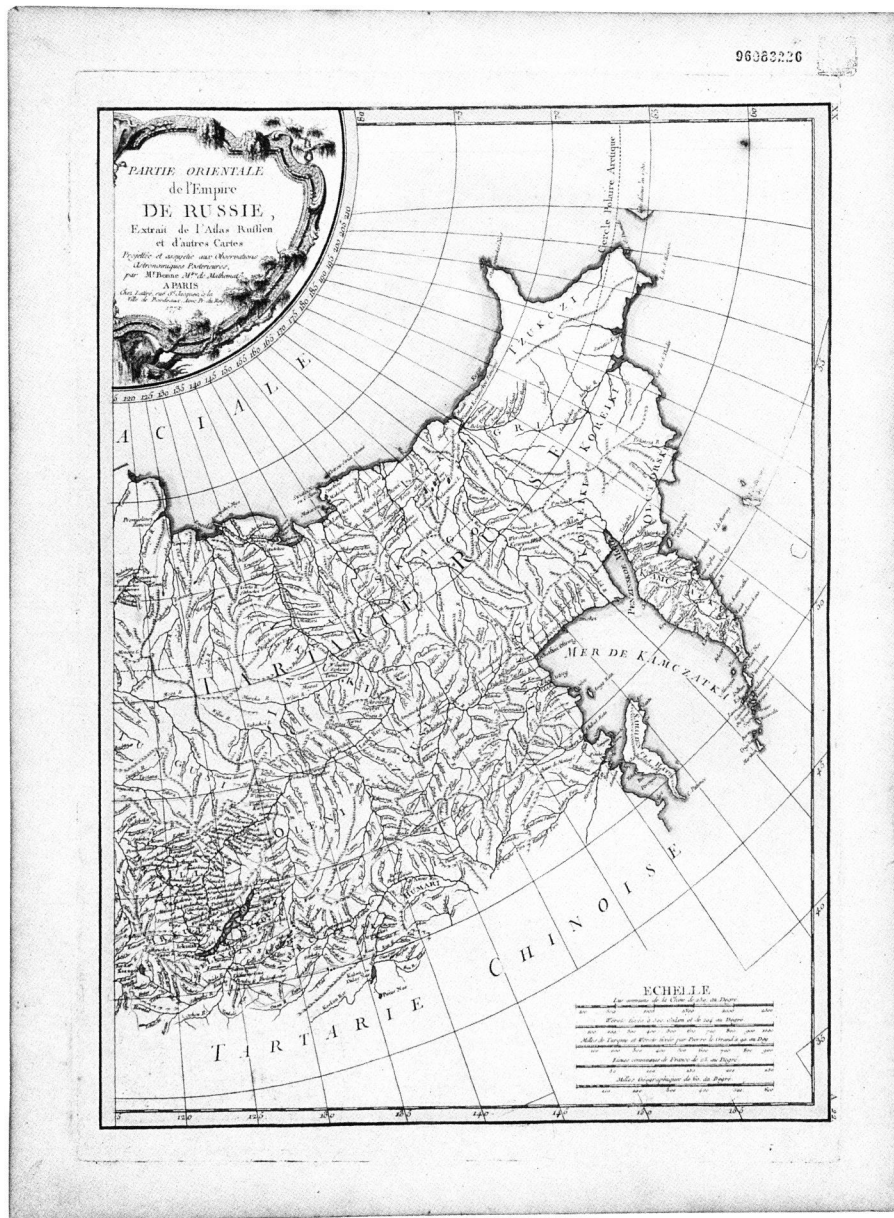
もっとも架空の島々が太平洋に描かれていることは前掲のテイシェラ図やブラウ図と同じであり、さらに琵琶湖～淀川が内海として描かれている。これは本図の原図となったポルトガルの宣教師 A.F. カルデイムの『日本殉教精華』所載図を踏襲したものである。【11-16】



3-7 I. C. Hommanni: 'Recentissima ASIAE Delineatio'

銅版・手彩色。58 × 50 cm。

本図は、ニュールンベルクに本拠をおいたホームマン（1664-1724）の「アジア図」である。彼は18世紀ヨーロッパの著名な地図家として、1737年、1748年版の世界地図帳が知られている。日本の周辺に注目すれば、本州・四国・九州の形状はやや不正確ながら地名が多く示されているのに対し、北海道付近の表現には様々の特色が認められる。カムチャツカ半島と本州の間には、小島が群島を成しており、それとは別に COMPAGNIE LAND の名をもつ比較的大きな島が描かれている。これは、この時期のヨーロッパ製極東図にしばしばみられるもので、地図によってはアメリカ大陸に連続するように描かれることもあった。【11-12】



3-8 'PARTIE ORIENTALE de l'Empire DE RUSSIE' (1771)

銅版・手彩色。52 × 38 cm。

本図は、フランスで発刊された「ロシア帝国東部図」である。ロシア東部には伝統的な地名 Tartarie（韃靼）が見える。オホーツク海をみれば、「く」の字の形に屈曲したサハリン島と千島列島が描かれているものの、日本は北海道島を含めて描かれていない。本図は、同時期の日本において確信がもたれていなかった間宮海峡を図示しているものの、サハリン島の形状や、北海道島との位置関係については、なお不明瞭な表現に止まっている。なお本図に先立つ1738-39年には、ロシアのベリング探検隊の支隊、シュパンベルグ隊が、カムチャツカ、千島、北海道東岸を探検している。

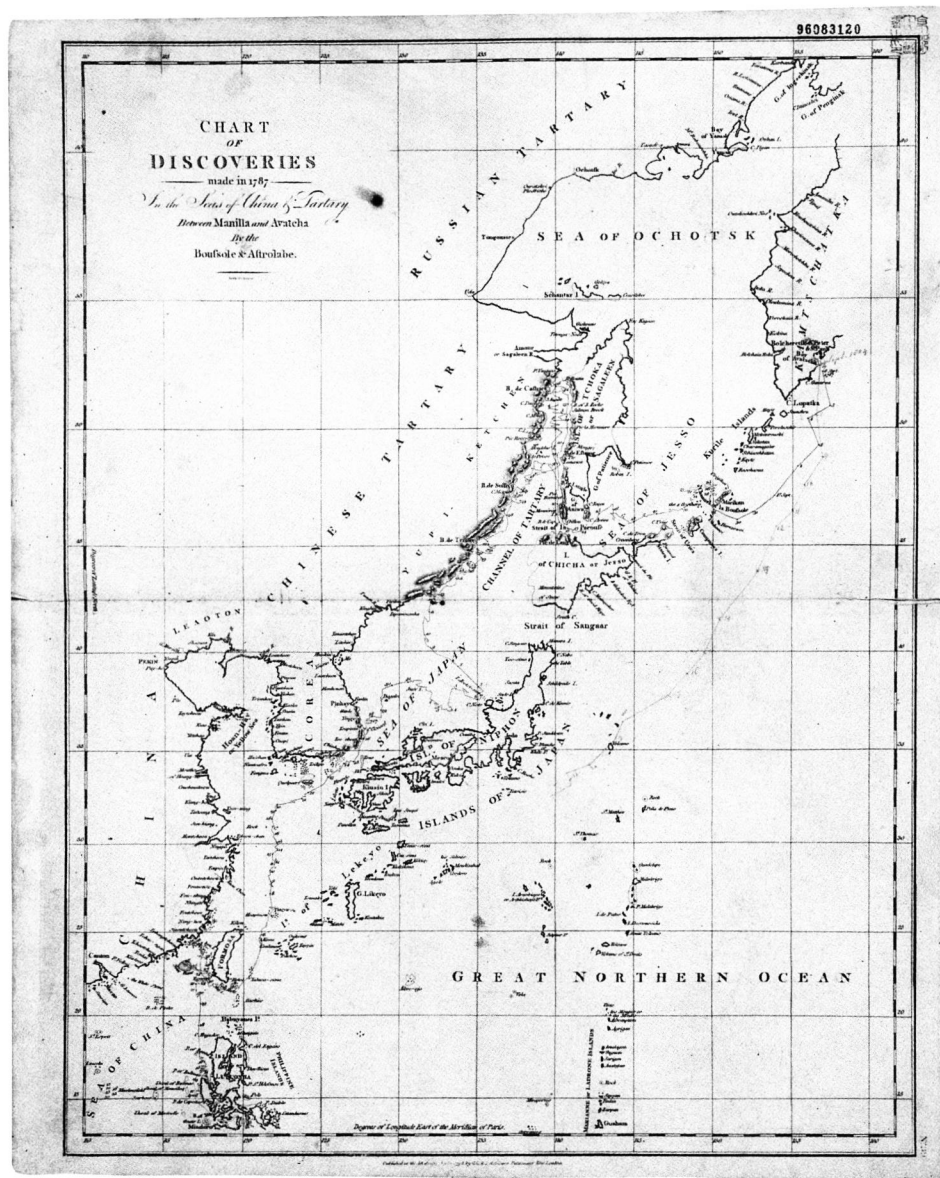
【11-40】

J. F. G. de la Pérouse: 'CHART OF DISCOVERIES made in 1787, in the Seas of CHINA and TARTARY' (1798)より

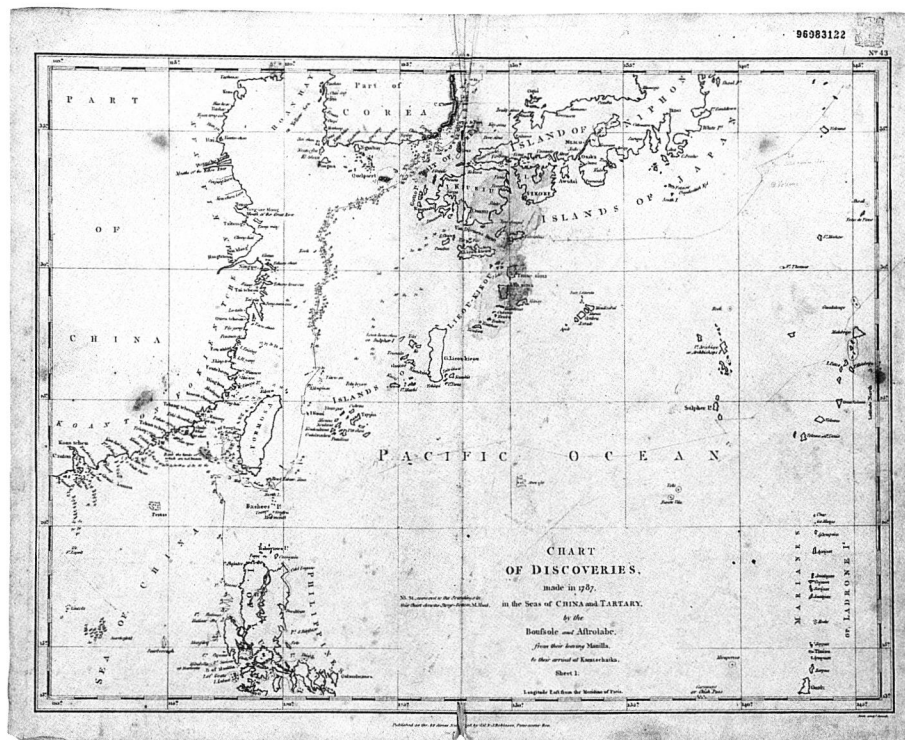
銅版。

本図をもたらしたラ・ペルーズ (1741-88) は、ルイ16世の命で世界一周を試みた人物である。彼の探検隊は、1787年に日本北方を航海測量したものの、その翌年にオーストラリア近海で消息を絶った。しかし、本国に送られていた記録によって『ラ・ペルーズ世界周航記』ならびにここに展示した附属地図帳が刊行された。なお本図はフランス語版ではなく、ロンドンで出版された英語版である。

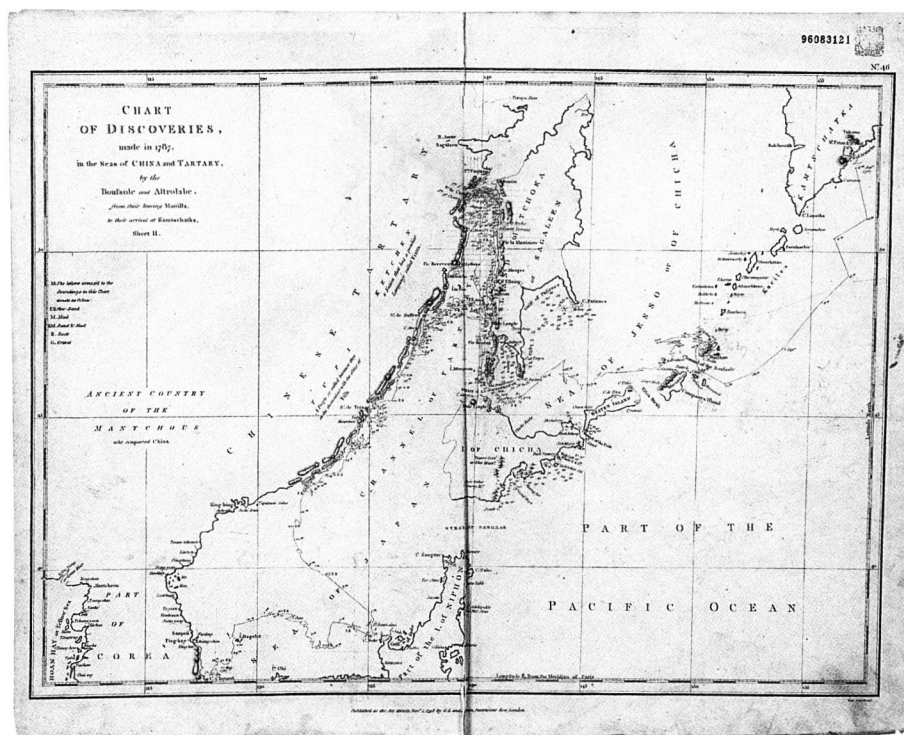
【11-17】



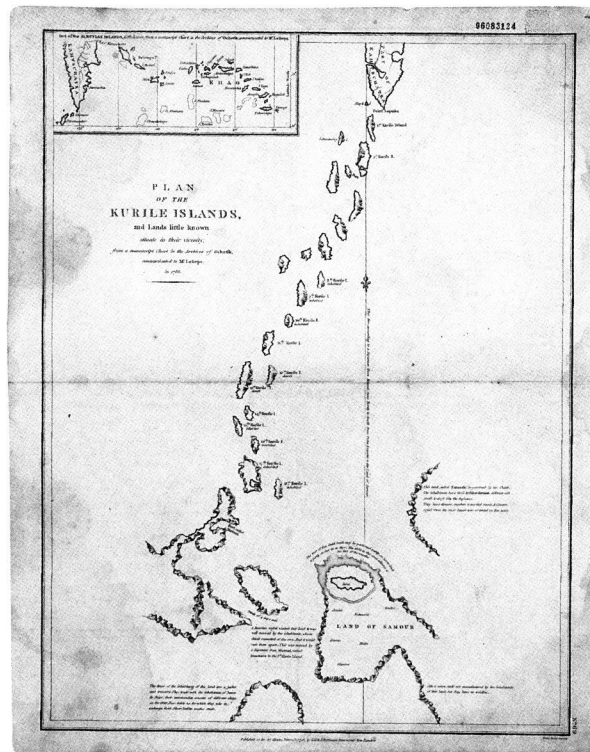
3-10 ラ・ペルーズ付図 No.39。52 × 42 cm。日本周辺でのラ・ペルーズの航海の軌跡を示している。探検隊が陸地沿岸に沿って航海していた所では、海岸線が測量された。しかし日本列島の大部分は測量されず、既成の地図が流用されたことが窺える。



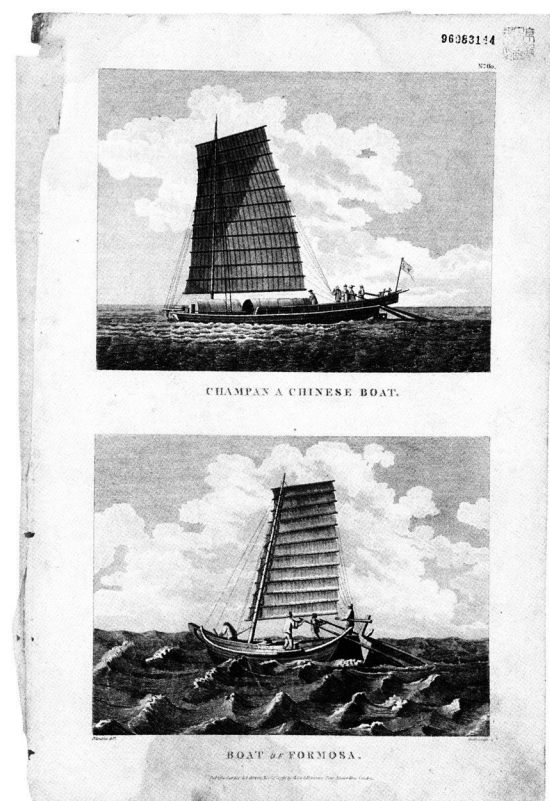
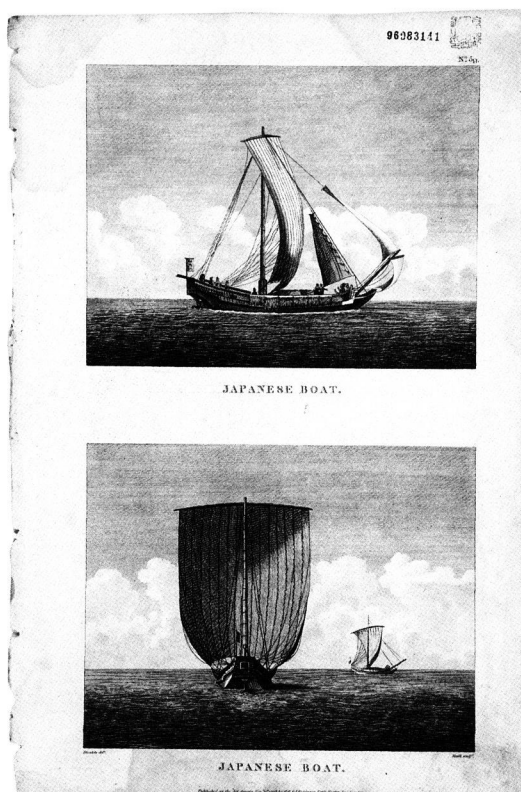
3-11 ラ・ペルーズ付図 No.43。53 × 42 cm。フィリピンより日本に向かう航海の軌跡が示されている。



3-12 ラ・ペルーズ付図 No.46。42 × 52 cm。日本海から間宮海峡、宗谷海峡、千島列島に至る航海の軌跡が示されている。間宮海峡では測量活動が集中して行われたものの海峡を通過しなかったこと、また宗谷海峡に「ラ・ペルーズ海峡」と命名したこと、択捉島らしき島を「カンパニーランド」と認めたことが示されている。



3-15 ラ・ペルーズ付図 No.69。53 × 42 cm。PLANと題されているように、クリル諸島（千島列島）の概念図である。

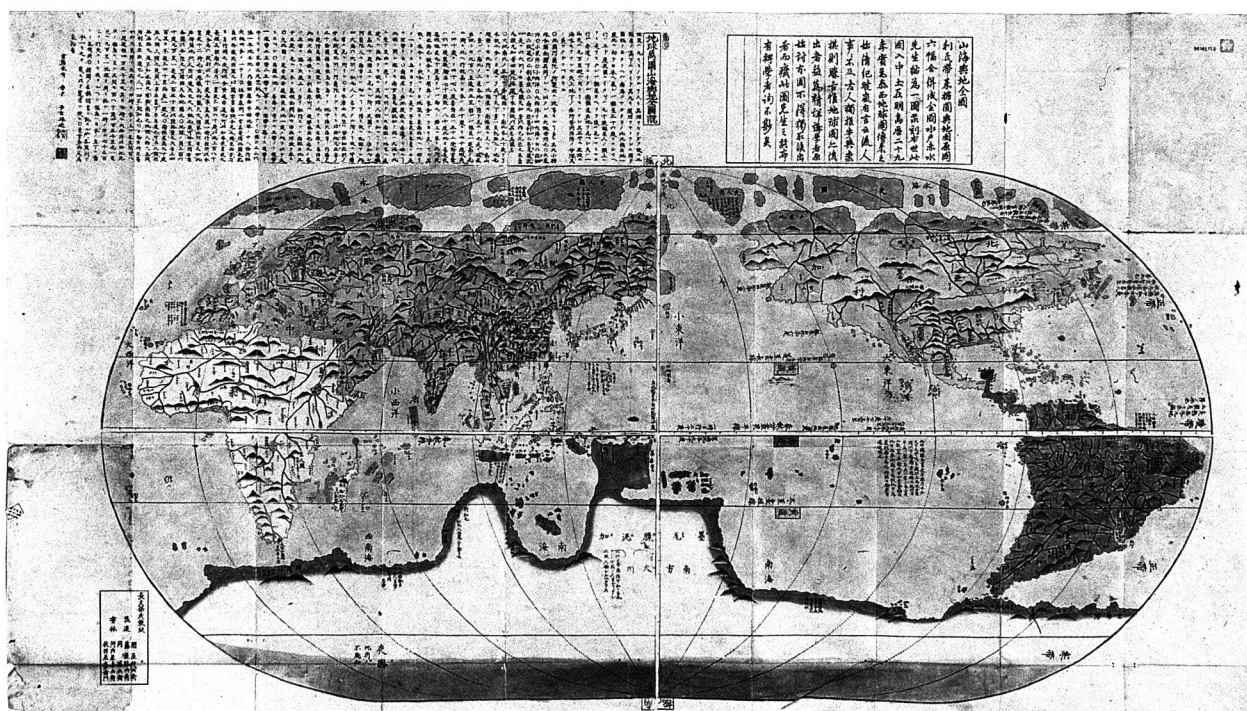


3-16, 3-17 ラ・ペルーズ付図 No.59, 60。28 × 42 cm。日本船・中国船のスケッチである。ラ・ペルーズは、上陸した地域によっては、風景や家屋のスケッチも作製した。

4. マテオリッチ系・蘭学系世界図

イエズス会マテオ＝リッチが明末の万暦30年（1602）到北京で刊行した漢訳世界図「坤輿万国全図」^{こんよ}は、南蛮世界図屏風とならんで、日本における古代以来の三国世界観に代わる西洋的世界像を伝え、わが国における世界認識および世界図作製に衝撃的な影響を与えた。日本語訳の同図写しおよび改訂・縮小による同図系の刊行世界図は、幕末に至るまで広く使用された。

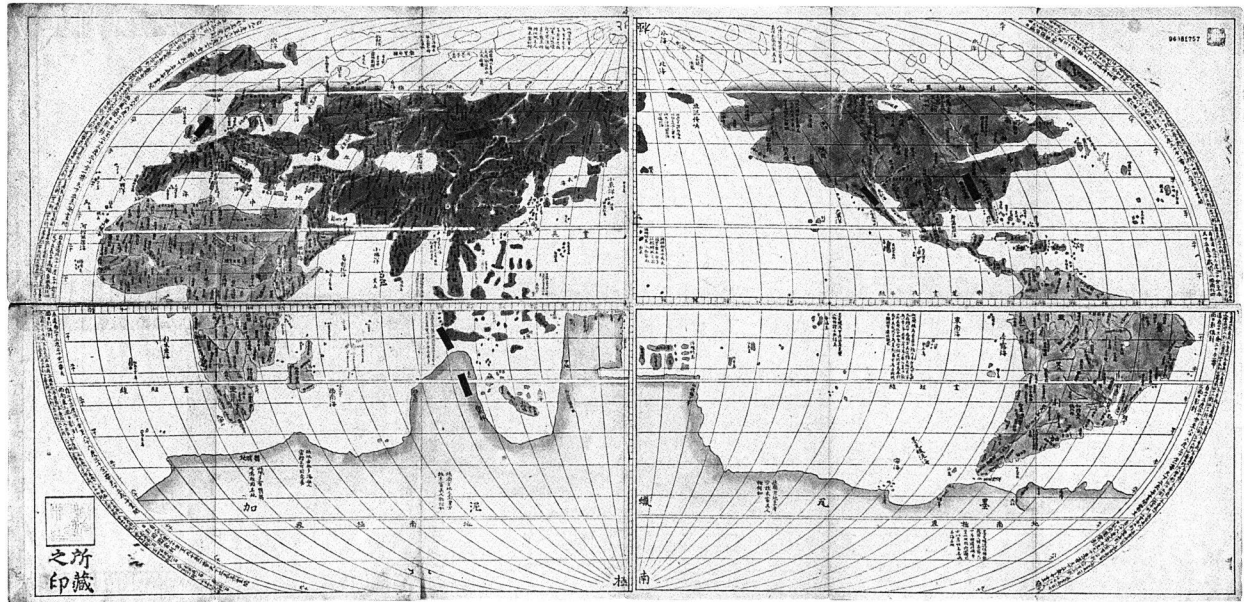
一方、蘭学の発達につれて、地球球体説をはじめ、新しい地理的知識も受容され、それにもとづく世界図も刊行されるようになった。司馬江漢や橋本直政などの蘭学系世界図は、世界を二つの半球に分けて描き、地球球体説を実感させる効果をもった。



4-1 長久保赤水「地球万国山海輿地全図説」(c.1788)

木版・手彩色。170 × 90 cm。

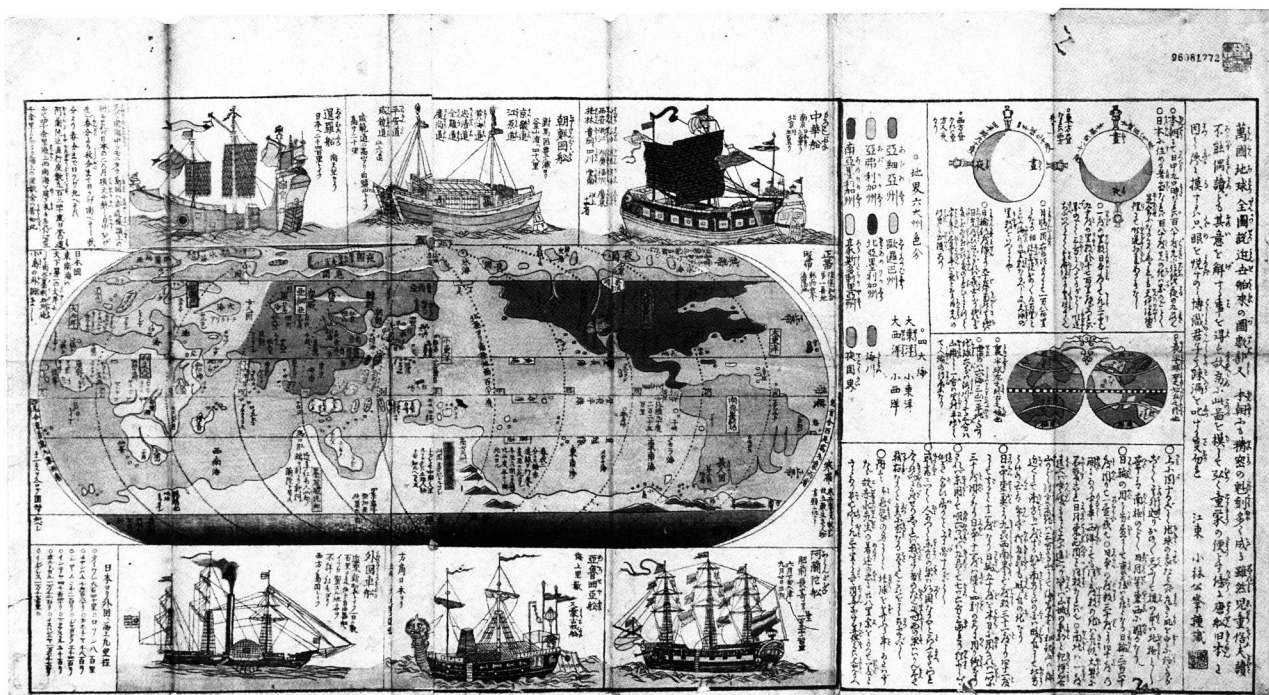
日本におけるマテオ・リッチ系の世界図は、18世紀初頭からすでに板行されていたが、地理学者としての長久保赤水の名声に支えられて広く受容され、改訂版・縮小版が繰り返し刊行された。本図は、北海道島周辺に関しては新調査の成果が織り込まれているとはいえ、基本的には2世紀も以前のマテオ・リッチ図を踏襲したものであり、北極圏に「夜人国」などの架空の世界を描くなど「時代遅れ」のものといえる。蘭学系世界図が出現していた18世紀後期以降に人気を得ていたことについて室賀信夫は、「当時としては新奇な両半球図に不安と抵抗を感じた大衆の保守的心情」に、本図が合致したのではないかと推測している。【2-4】



4-2 稲垣子戩「^{こんよ}坤輿全図」享和2年（1802）

木版・手彩色。57 × 118 cm。

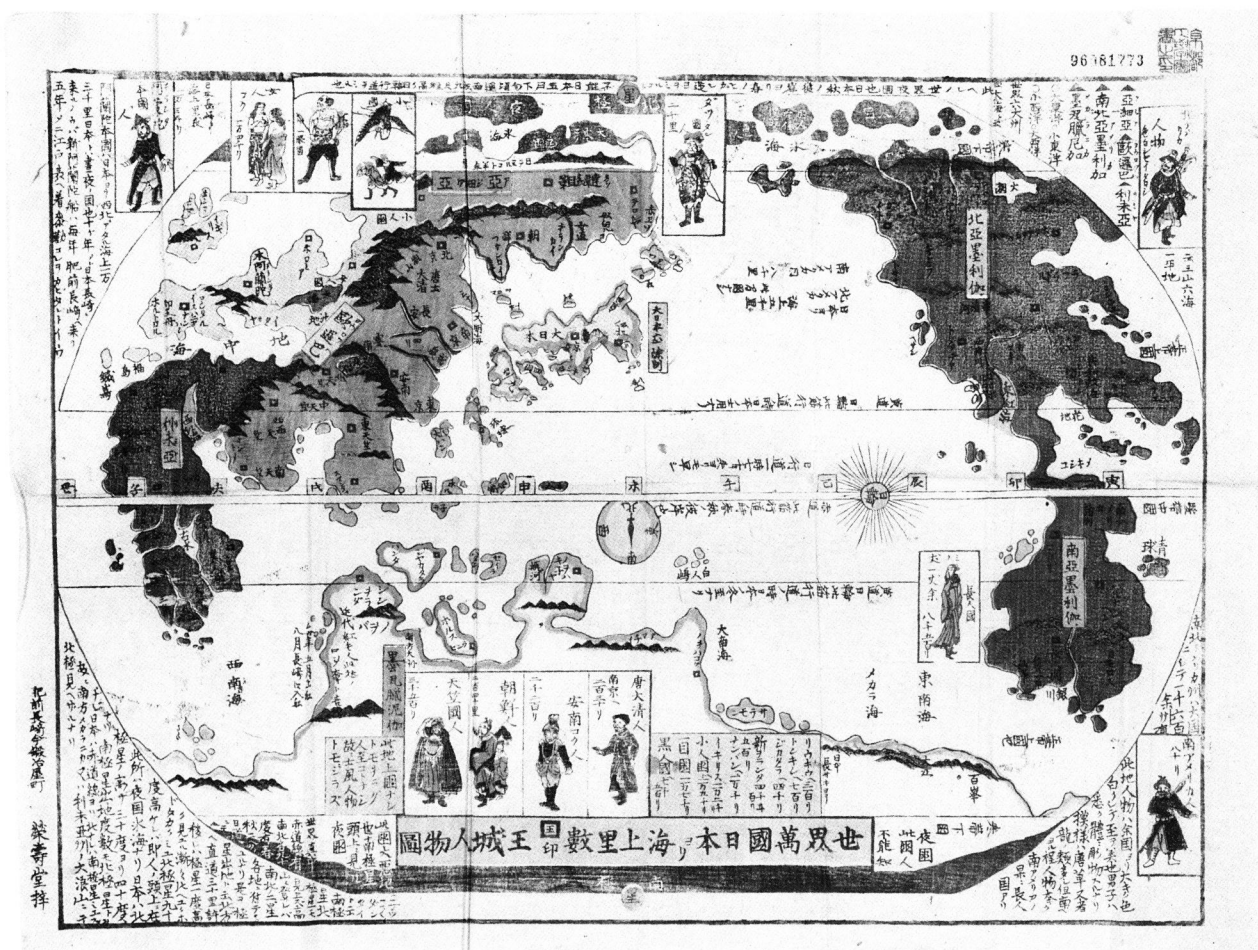
本図は、長久保赤水「地球万国山海輿地全図説」より後に作製されたものでありながら、その内容はより古い要素をとどめている。作者稲垣子戩は橘南谿に天文・地理などを学び、享和2年に『^{こんよ}坤輿全図説』を著した。その内容は、マテオ・リッチの「^{こんよ}坤輿万国全図」の地誌的記載を日本文に改めたものであり、本図はその忠実な縮小版として『^{こんよ}坤輿全図説』に付されたものである。「^{こんよ}坤輿万国全図」の世界像をそのまま日本語に翻訳する作業に徹したものといえる。【2-8】



4-3 小林公峰「万国地球全図説」(c.1852)

木版・色刷。74 × 41 cm。

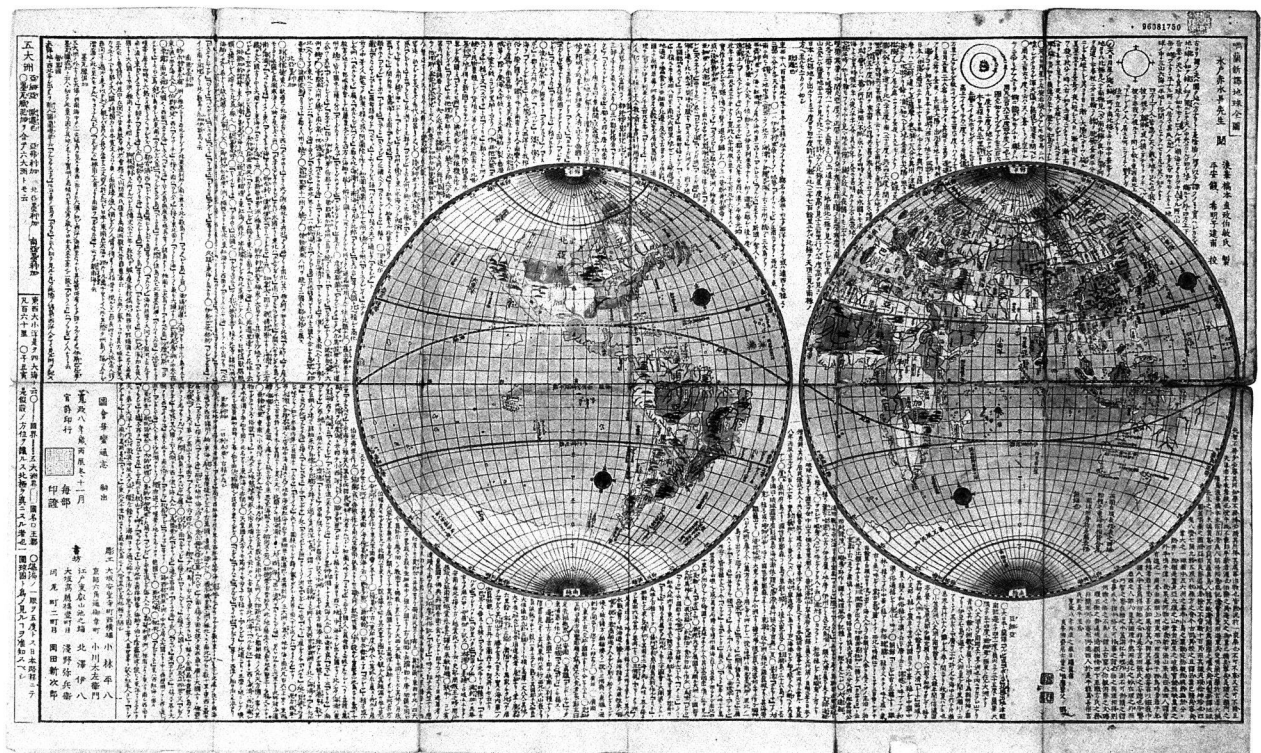
江戸時代末期には、幕末の民衆が購買層となった世界図が多く刊行された。本図は「南方大洲」や「夜国」、「女人国」などを記す簡略化されたマテオ・リッチ系の世界図を中心におくものの、その周囲には「中華船」、「朝鮮国船」、「暹羅（シャム）船」、「阿蘭陀船」、「亜魯西亞船」、そして「外国車船」として外輪船を描いている。また右には、地球が球体であることがイラストを用いて平易に説かれている。このような「大衆向け」世界図には年記を欠くものが多いが、ペリー艦隊の来航以前から刊行されていたとみられる。【2-23】



4-4 「世界万国日本ヨリ海上里数国印王城人物図」(1850以降)

木版・色刷。47 × 36 cm。

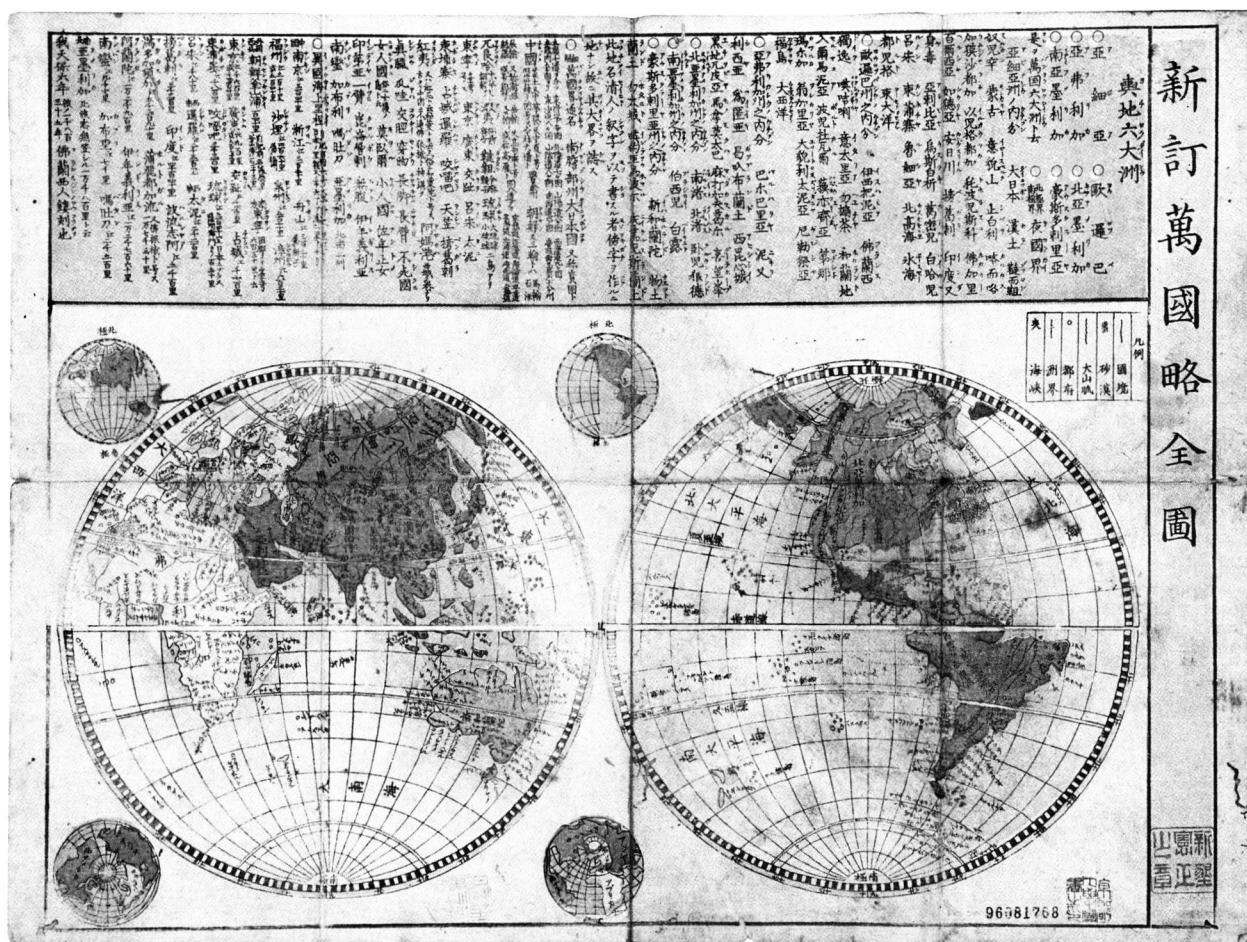
本図も、江戸時代末期に出された「大衆向け」のマテオ・リッチ系世界図である。本図においては大陸の形状はさらに簡略化され、地図としての正確さは大きく失われている。しかし本図の目論見は、架空の国を含めて国ごとの人物の姿態を示し、そして日本からの遠大な里程を示すことにあったことは容易に見て取れる。【2-24】



4-5 橋本直政「喁蘭新訳地球全図」寛政8年（1796）

木版・手彩色。55 × 93 cm。

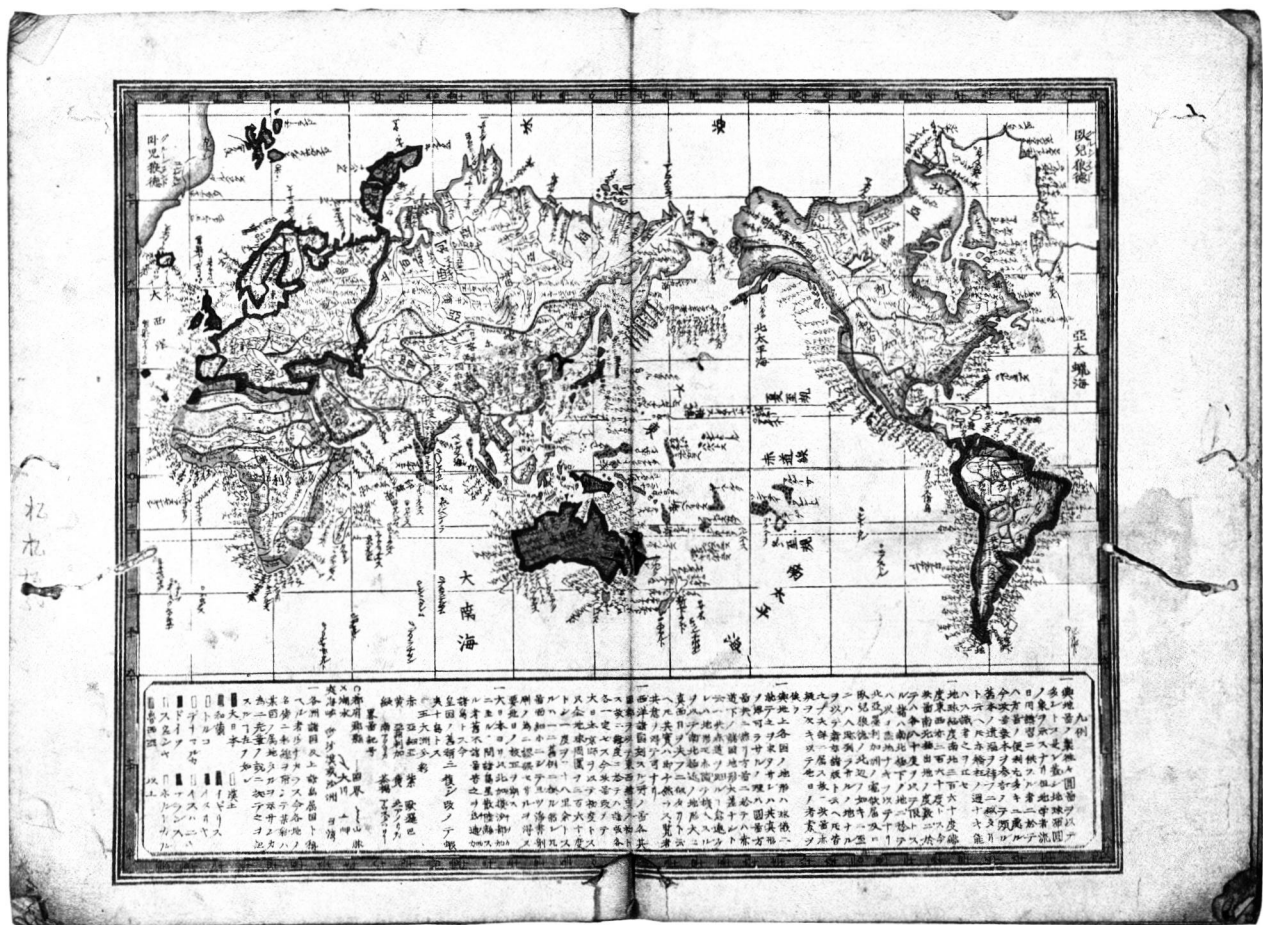
ヨーロッパ製世界図に依拠した蘭学者による世界図の最初の代表作は、司馬江漢の寛政4年（1792）の「地球図」だといわれる。本図の作者橋本直政は大坂における蘭学の草分け的存在であり、大坂で作られた最初の蘭学系両半球世界図ということになる。しかし「新訳」をうたいつつも、当時すでに「西洋の旧図に依て新図を用いず」と批判されている。カリフォルニア半島が島として描かれていることや、オーストラリアがニューギニアと未分離であることに表れているように、最新の原図を資料としたのではなく、18世紀半ば以前のものを用いたらしい。図の周囲は地誌的記載で埋め尽くされているが、これもまた、蘭学の最新情報であったわけではない。【2-1】



4-6 「新訂万国略全図」

木版・色刷。49 × 36 cm。

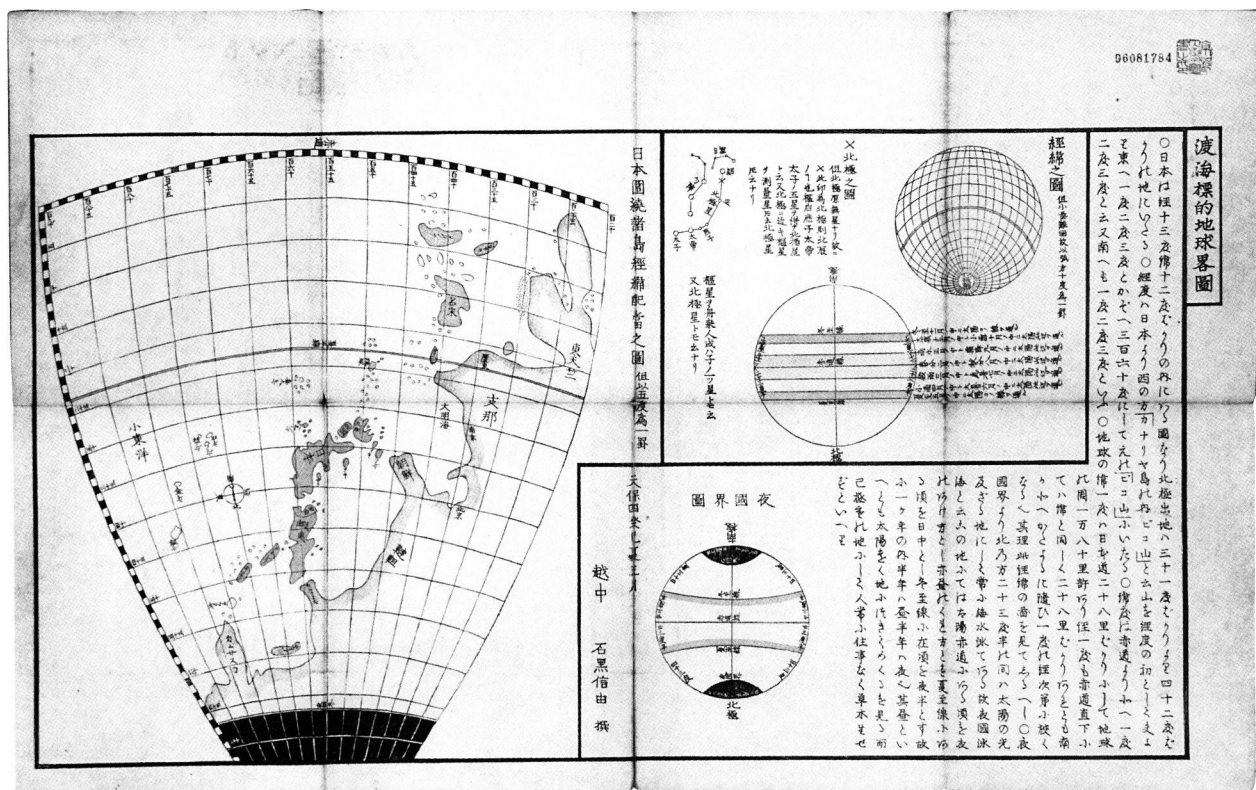
作者・作製年不明であるが、解説の末尾で、「天保6年（1835）のフランス人原図による」と述べる両半球図である。この原図については不詳であるが、本図自体が描く大陸の海岸線はかなり簡略化されていることから、「大衆向け」に作製され、販売された世界図であったと思われる。それは、穿脚・長脚・長臂・不死国、女人国、小人国に言及する上部の解説にも表れている。これらの異域は、マテオ・リッチ系世界図や西川如見『華夷通商考』（1695）にもみられ、庶民向けの世界図・世界像を構成する重要な要素であった。【2-19】



4-7 半山樵夫「万国地理細図」嘉永4年（1851）

木版・色刷。33 × 22 cm。

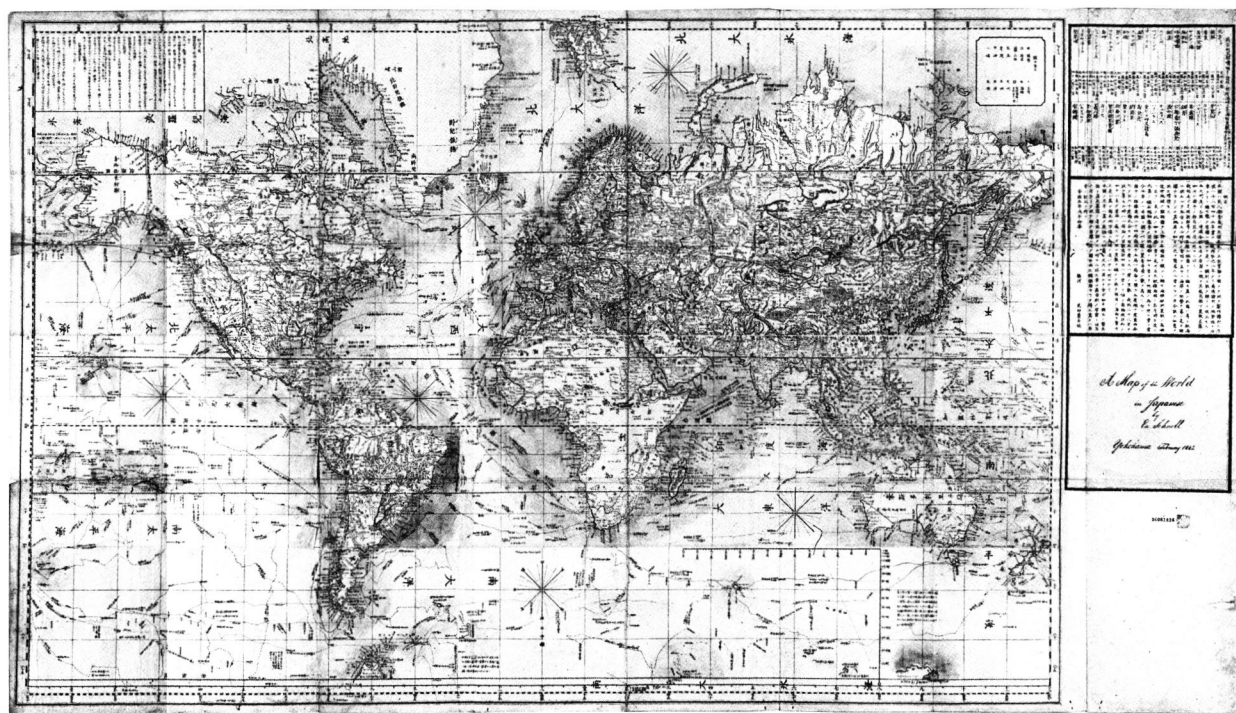
携帯可能なサイズの折本に収められた簡略な世界図である。地図は見開き2面分のみがみられるに過ぎないが、そのうちの一つはメルカトル図法による。本図は幕末に流布していた簡単な蘭学系世界図であるが、実は鈴木（鱸）重時による嘉永4年（1851）「校訂輿地方円図」の海賊版であり、本来の作者名と解題を削除して作製されたものに過ぎない。しかもその鈴木重時「校訂輿地方円図」にしても、弘化3年（1846）の永井則「銅版万国方図」に部分的な修正を加えて作製したものなのである。蘭学系の最新世界図への需要が高まるにつれ、安易に世界地図の複製が流布する事態が生じたことを窺わせる。【2-56】



4-8 石黒信由「渡海標的地球略図」天保4年（1833）

木版・色刷。64 × 40 cm。

本図は越中の測量家・地図学者として知られる石黒信由が作製したもので、蘭学系地図学の基礎知識をやさしく説明したものである。右半分は、経緯線や回帰線、極圏（夜国界）について述べ、左半分では北極側からみた日本周辺を図示している。ただしその内容は最新のものとは言えず、北海道の形状をみるかぎり、林子平図の段階に止まっている。とはいえ、本図のような蘭学系地図学の基礎知識が一枚にまとめられて板行されていたことは興味深い。【2-34】



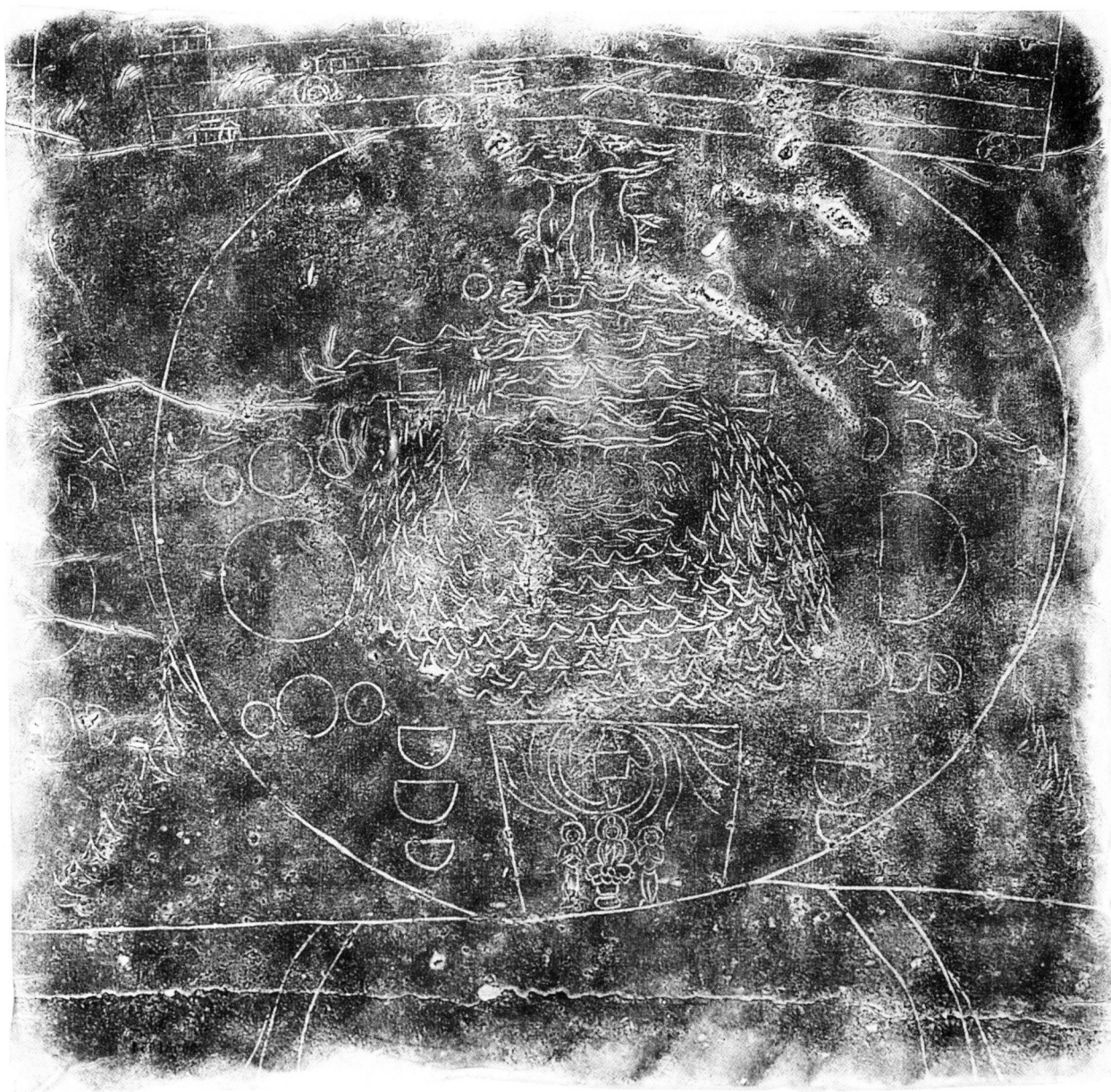
4-9 武田簡吾訳 'A Map of the World in Japanese' 文久2年(1862)

木版・手彩色。155 × 89 cm。

幕末になると、メルカトル図法による大型の世界図が刊行された。本図はその代表作の一つで、イギリスの「庸普爾地氏」の1845年の図を訳したものと述べている。もっとも本図はその初版（安政5年1858）ではなく、横浜居留のオランダ人E. Schnellによって4年後に刊行されたものである。探検家の軌跡が示されており、そのなかにはラ・ペルーズ（ペローセ氏）もみえる。本図の原図は、安政元年（1854）に下田に停泊していたロシアのプチャーチン使節から得られたものとされる。原図は、地図の塩抜きのために使節から日本側に一時的に預けられていたもので、これを沼津在住の蘭方医武田簡吾らが翻訳したものだという。【2-67】

5. 仏教系世界図の展開

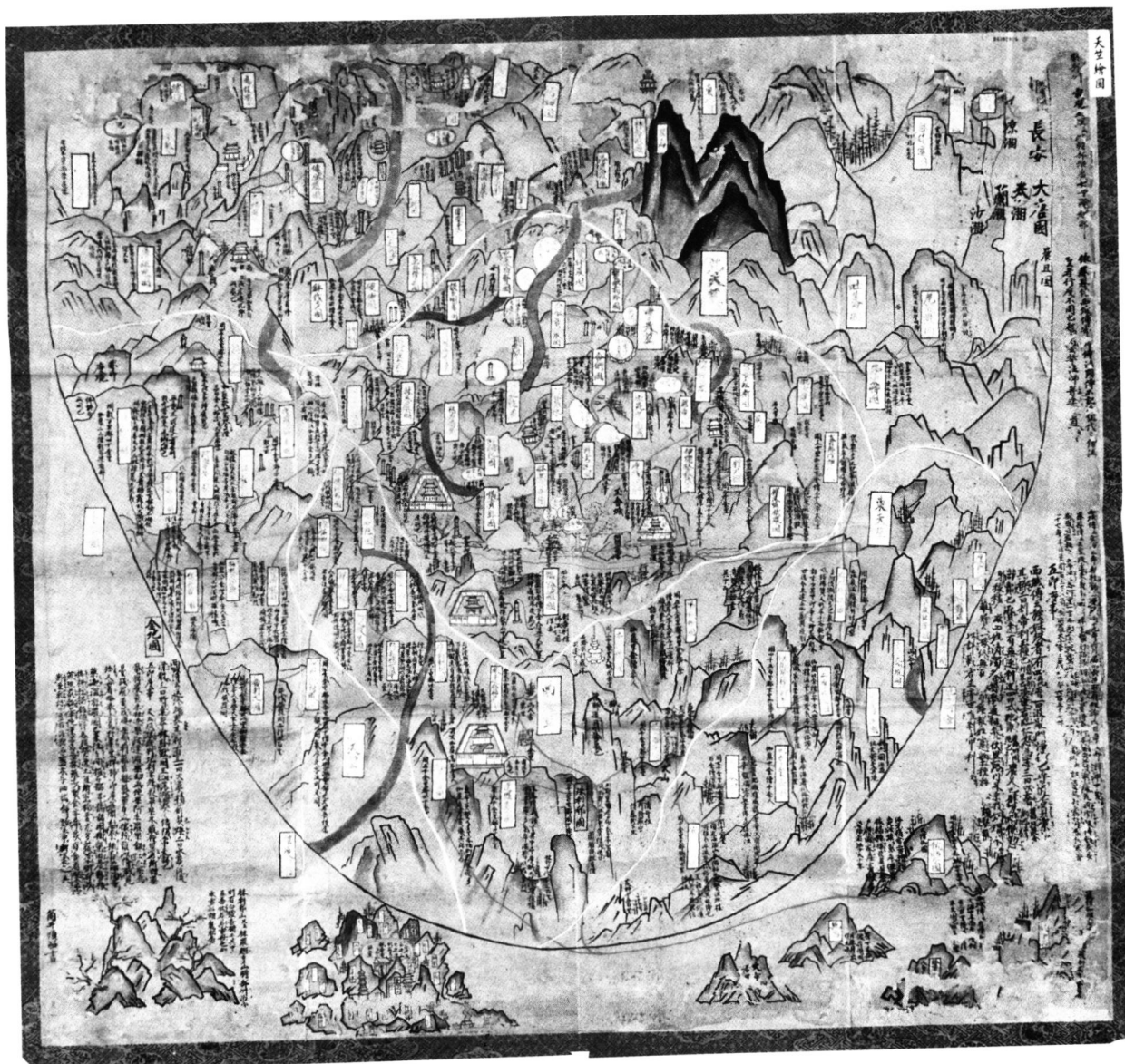
仏教系世界図とは、仏教で人間の居住世界とされる南瞻部洲^{なんせんぶしゅう}を、基本的に北広南狭の形で描いたものである。『大唐西域記』の記載を地図化した法隆寺蔵の「五天竺図」（重懷書写。貞治3年（1364））が現存最古の仏教系世界図である。玄奘三蔵の旅行ルートが朱線で示されており、南瞻部洲^{なんせんぶしゅう}の中心よりやや北に描かれた渦巻は、阿耨達池^{あのかたつち}（無熱池）を水源とする四大河が四方に流出する様子を描いたものである。近世になって、西洋的な世界像が将来されると、それを包摂しつつも、日本・唐・天竺^{ほうたん}からなる伝統的三国世界観・仏教的世界観と調和させようとする動きが現れた。鳳潭^{ほうたん}の「南瞻部洲万国掌葉之図」はその代表例である。



5-1 東大寺大仏蓮弁須弥山図拓本

拓本。47 × 48 cm。

仏教美術の遺品のなかには、5世紀にインドで成立し、玄奘によって漢訳された『俱舍論』が述べる世界像を示したものがみられる。『俱舍論』は、この世界を、中心にスメール山（須弥山）がそびえたつ巨大な円盤だと説く。スメール山は、七重になった方形の山脈に取り囲まれ、さらにその外側は海に満たされ、その海には東西南北にそれぞれ一つの大陸が浮かんでいる。すなわち東に半月形の勝身州、南に台形もしくは逆三角形の瞻部洲、西に円形の牛貨州、北に四角形の俱盧州である。このうちの瞻部洲が人の住む世界であり、南瞻部洲とも呼ばれた。東大寺の大仏の蓮弁には、簡略ながらもさにこのような世界像が描かれており、南瞻部洲は下部の台形に相当する。【2-74】



5-2 筒井順昭「天竺絵図」

手書・手彩色。133 × 123 cm。

『俱舎論』の示す世界像は、中世日本の仏教的な世界図に影響を与えた。日本に残された最も古い世界図は、別掲パネルの法隆寺蔵「五天竺図」(1364)であるが、これと同系統の逆三角形に近い卵形の南瞻部洲図が各地に伝存している。本図は、もと鮎沢信太郎旧蔵図であり、昭和37年、学位受領の記念として室賀信夫に贈られたものである。図の上半が欠落しているのか、南瞻部洲の北部が描かれていないこと、また「筒井順昭書」とする記名が左下にあり、これが図中の文字と異筆ともみえることが特徴である。筒井順昭は筒井順慶の祖父ともいわれるが、詳らかではない。【3-19】



5-3 円通「須弥山儀図」(1813)

木版。62 × 176 cm。

須弥山を中心とする仏教的な世界観は、近世以降も強い影響力をもち、ヨーロッパの天文学と世界図から新しい知識を摂取しながらも、仏教的な枠組みは堅持しようとした。そのような護法的な立場から活動した代表的な僧の一人が、本図を刊行した円通である。本図は、須弥山を中心とする円盤状の世界を示したものであり、盤上右下には南瞻部洲が描かれている。しかし本図の特色は、太陽と月の運行経路を時計の仕掛けを応用して示した模型、すなわち「須弥山儀」として世界を示しているところであり、ここにヨーロッパの天文学に対する彼の対応を見ることができる。

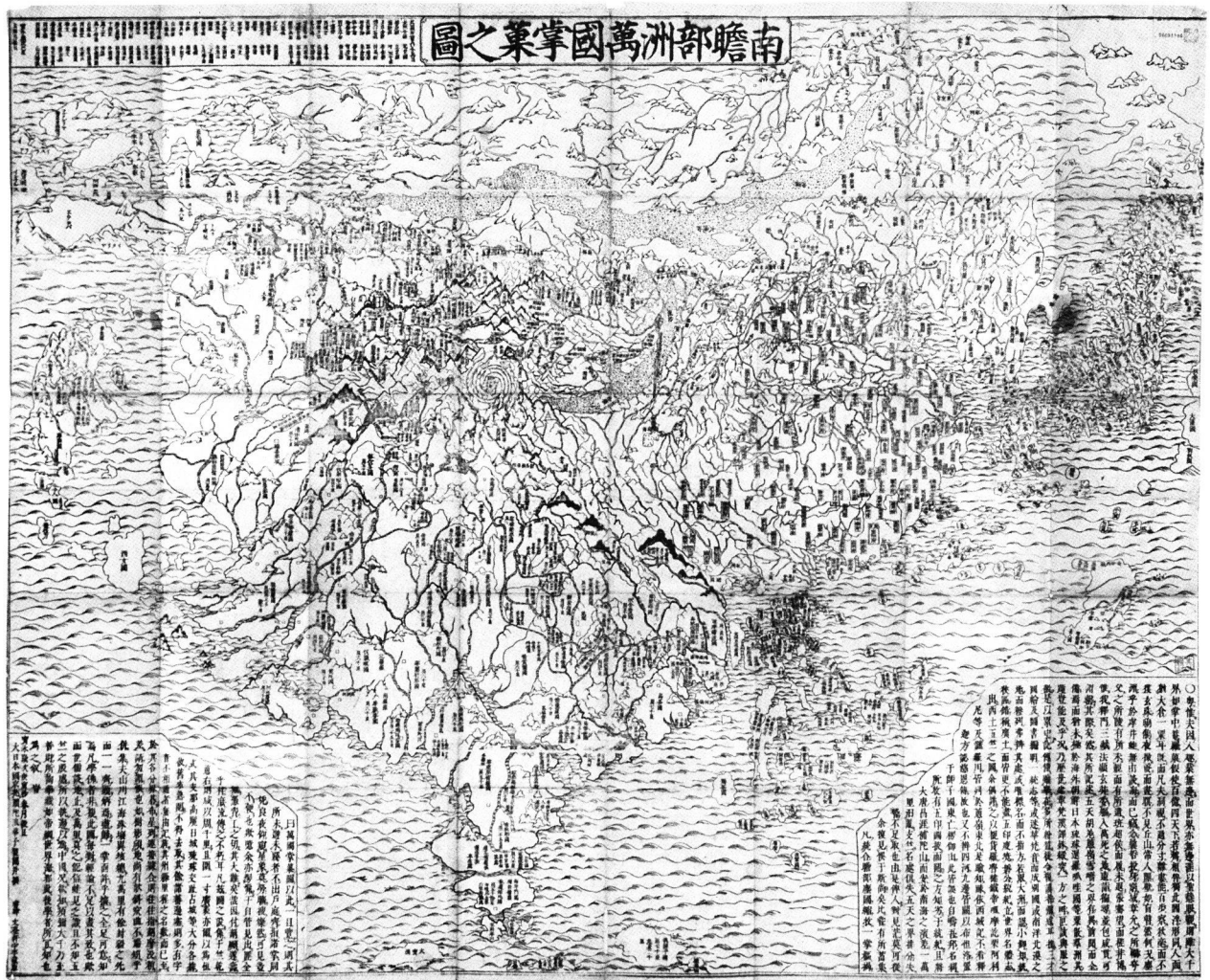
【2-78】



5-4 「^{なんせん ぶしゅう}南瞻部洲之図」(c.1698)

手書・筆彩。161 × 192 cm。

本図は、当室賀コレクションのなかで最もよく知られた図の一つであり、近世の仏僧による数少ない大型の手書き^{なんせん ぶしゅう}南瞻部洲図である。類似の図としては、神戸市立博物館蔵の南波松太郎旧蔵図が著名であり、ともにカブラ型もしくはうちわ型ともいうべき形状を示している。これは『俱舍論』がいう逆三角形型の^{なんせん ぶしゅう}南瞻部洲の形状を示したものであり、^{あのかたち}玄奘のたどった道のりや阿耨達池が描かれている点で、本図は中世的な天竺図を継承したものである。しかし海岸線には屈曲があり、インド半島の先端が尖っていること、中国やインドシナ半島が比較的大きく描かれている点をみれば、近世に伝えられたヨーロッパ製世界図に触発され、中世的な天竺図を再生させようとしたものであることがわかる。なお本図の作製者については仏僧宗覚(1639-1720)であるとも推測されている。宗覚は、中世的な五天竺図の写本や、^{しゅみせん}須弥山を中心とする4大陸を描いた地球儀などを残している。【2-77】



5-5 浪華子「南瞻部洲万国掌菓之図」宝永7年（1710）

木版。145 × 117 cm。

本図は、板行の南瞻部洲図としては最初の、かつ最も詳細な図として広く流布し、多くの通俗版・簡略版が本図を基にして後に刊行された。カブラ型の南瞻部洲図に比べ、左右の対称性はやや失われ、図の周辺には中国やインド以外の様々な地域が描かれている。とりわけ北東部には、ヨーロッパが群島状に描かれ、日本の北部や南部にも島がみられる。玄奘の足跡は明示されず、単に世界図として南瞻部洲を示すことを意図したものだといえる。作者浪華子は、華嚴寺の開祖鳳潭の筆名であるといわれる。【2-45】



5-6 存続「世界大相図」文政4年(1821)

木版。59 × 130 cm。

本図の作者存続(-1842)は、前掲「須弥山儀図」の作者円通を師とした浄土宗の僧で、円通同様に護法的な立場から仏教的世界観を唱えた。本図は先の「須弥山儀図」によく似ており、須弥山を中心とする円盤状の世界とその解説を示している。ただ興味深いことに、図中右下の逆三角形状の南瞻部洲（南閻浮提）には、赤道・夏至線・冬至線が記されている。

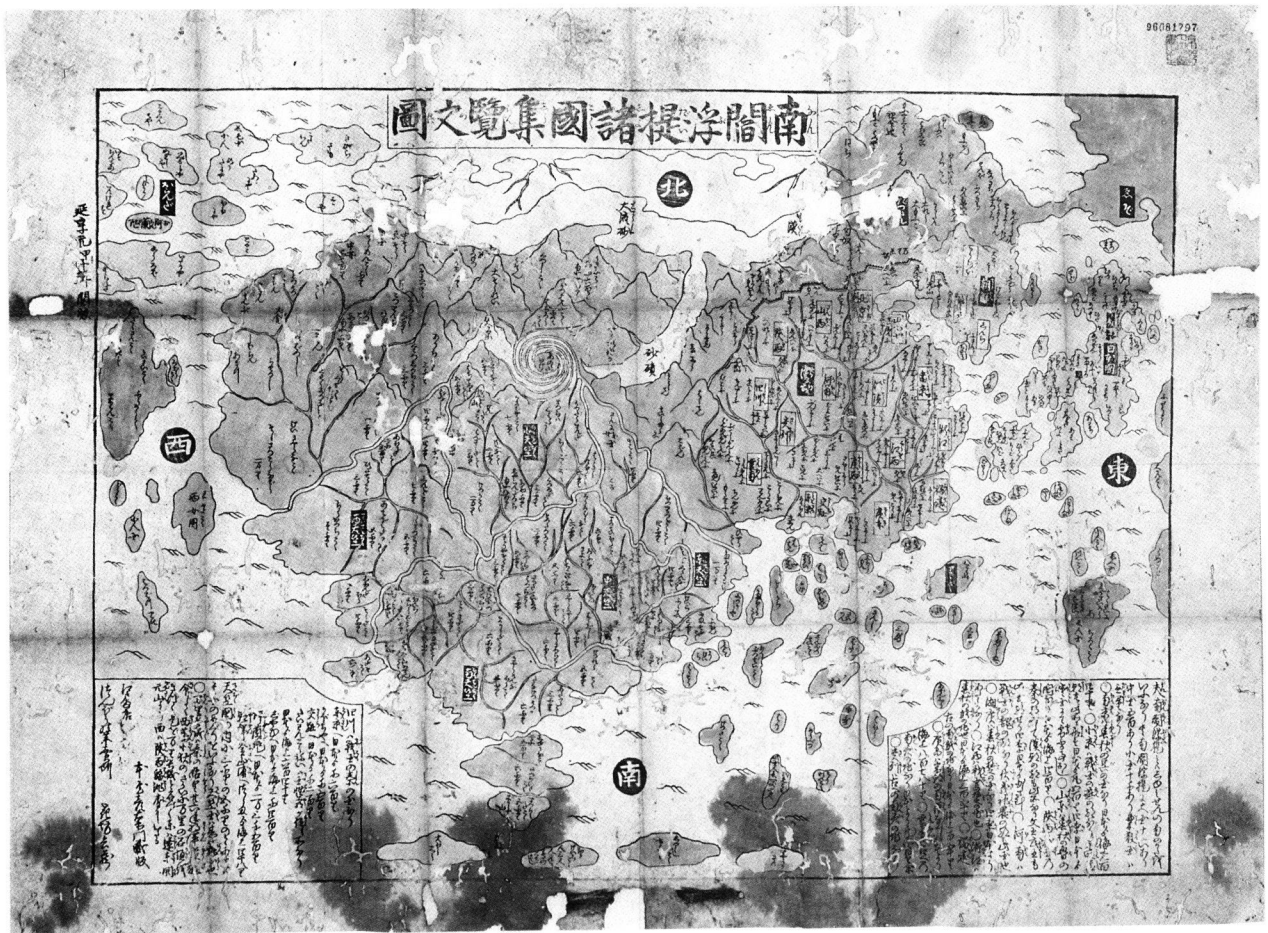
【2-21】



5-7 存続「天竺輿地図」文政11年(1828)

木版。59 × 128 cm。

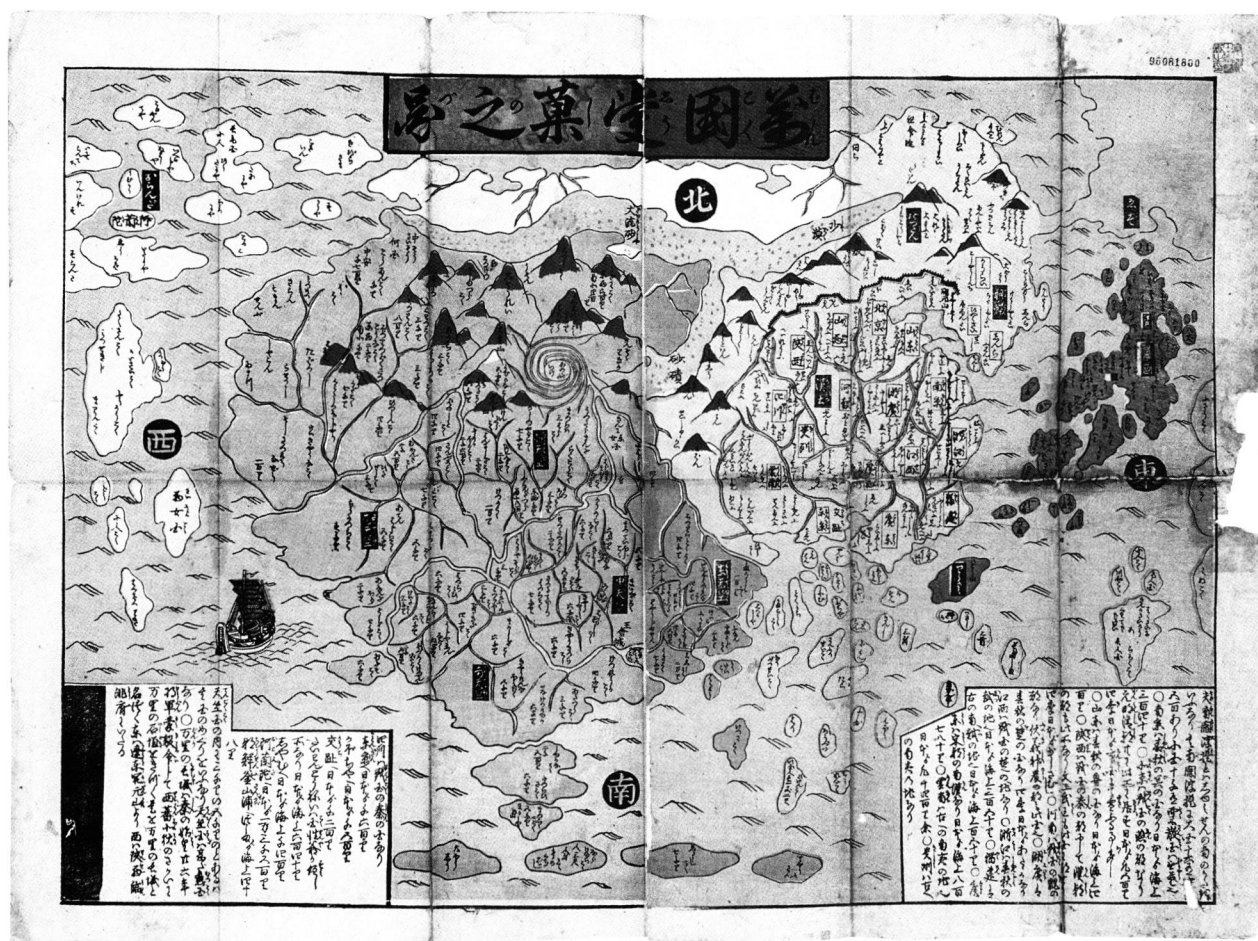
本図は、仏国土インドを表したものであるが、もはや単純な逆三角形や卵形の形状をとってはいない。インド半島の輪郭をみるかぎり、ヨーロッパ系の南アジア図を直接下敷きにしたことが窺われる。そして本図は、おそらく江戸時代唯一の日本で刊行されたインド専図である。しかし詳細にみれば、阿耨達池の渦巻きや、地名や注記が『西域記』や『法顕伝』の内容を反映している点で、^{あのくたっち} 仏教的南瞻部洲図の伝統をやはり継承していることがわかる。作者存続は本図の題言のなかで、^{なんせん おしゅう} 仏跡を図として示すことによって仏法を学ぶ者の心情を深め意図を述べている。【2-38】



5-8 花坊兵蔵「^{なんえんぶだい}南閻浮提諸国集覽之図」延享元年（1744）

木版・色刷。52 × 71 cm。

本図は、前掲の浪華子作「^{なんせんぶしゅう}南瞻部洲万国掌菓之図」をおよそ4分の1に簡略化し、地名と解説を仮名書きとした民衆向けの世界図である。作者花坊兵蔵は、本図と同じ版元から別に『聚類参考日本唐天竺諸国漸』と題する書を出版し、本図の解説としている。おそらく本図は、仏教的世界観の啓蒙を真に意図したものではなく、従来民衆になじみ深いものであった日本・唐・天竺からなる三国世界観を、^{なんせんぶしゅう}南瞻部洲図の上に表現しようとしたものであろう。作者花坊は、庶民を対象とした文筆業と売薬業を兼ねていた人物であった。【2-46】



5-9 「万国掌菓之図」

木版・色刷。70 × 53 cm。

庶民向けの世界図であり、船が一艘加えられていることを除けば、花坊図と同じである。しかし本図のタイトルには南瞻部洲や閻浮提という言葉は記されておらず、単に世界図としてのタイトルを持っているに過ぎない。このことは本図が、仏説を啓蒙するためでなく、庶民向けの世界図であったことを示唆している。簡略化されたリッチ系世界図が幕末に流布していたのと同様に、精密とはいえない伝統的な形態の仏教系世界図が庶民には歓迎されていたことに目を向けておきたい。【2-49】

6. 中国系世界図

日本を描く現存最古の中国図は、弘安2年（1279）に仏照禪師によって伝えられたとする東福寺栗棘庵蔵の「南宋拓本輿地図」であり、原図は現存していない。同図は東方海上に「日本・琉球」などを小さく記入しているだけであるが、「混一疆理歴代国都之図」^{こんいつきょうり}（龍谷大学蔵）では行基図系の日本の形状が描かれている。同図は李朝太宗2年（1402）に李蒼が、元の李沢民による「声願広被図」と元末明初の僧清濬^{せいしゆん}による「混一疆理図」^{こんいつきょうり}を合わせて一図としたものである。室賀信夫は、ヨーロッパ図の場合と同様に、中国系世界図における日本部分の原図・情報・認識等を問題とし、「混一疆理歴代国都之図」に、日本が南北に長い列島として描かれていることに注目した。『魏志倭人伝』に記す日本各国の里程・方位の矛盾を、同図のような認識を想定することで説明する試みを提示した。



6-1 「唐絵図」

手書・手彩色。120 × 90 cm。

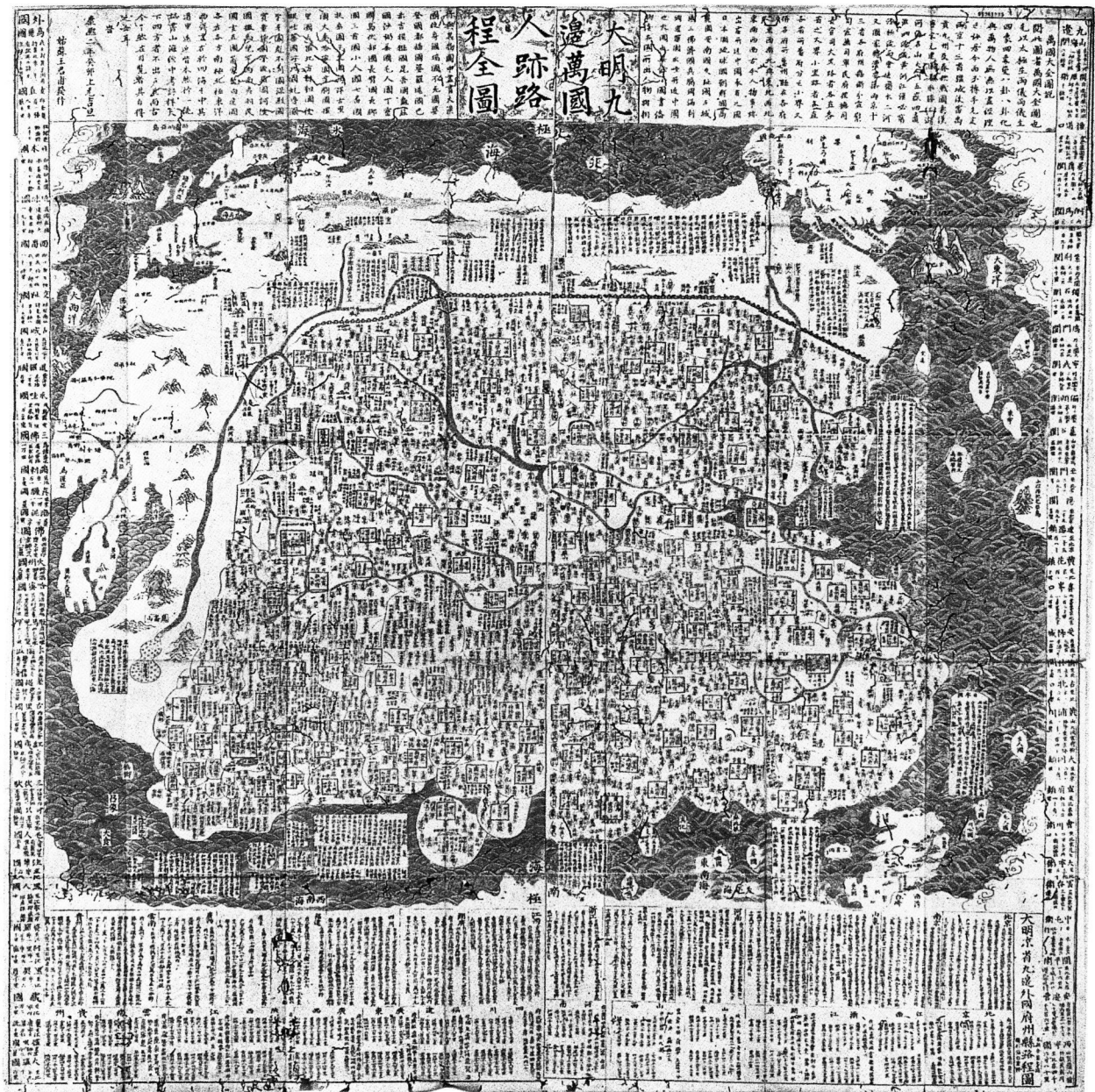
本図は、作製年・作製者ともに不詳であり、裏表紙に天明6年（1786）片桐氏と持ち主の名が記されているのみである。しかしその内容は、明清時代の中国図の典型を示すものとなっている。すなわち図の四辺には、中国の東と南を大海、北に長城と砂漠、そして西には黄河の最上流にヒョウタン型に描かれた星宿海とその水源となる崑崙山とを配置するやり方である。中国系世界図はこのような中国図をベースとしていた。【3-20】



6-2 青苔園「清朝一統之図」天保6年（1835）

木版・色刷。53 × 66 cm。

本図は、左上の注記によれば、清の道光15年（1835）に「呉門陳松亭」の図を写したとする日本で作製された世界図である。その内容は、中央に中国、その左にインド、右に日本・朝鮮や大きく描かれた琉球を示す構図をとるものであり、純粹に中国的な世界観を示すというよりは、日本特有の三国世界観に立脚して、中国系世界図のなかに天竺等を配置したものであると考えられる。従って清製の図を単に写したもののかどうかは疑いがもたれている。また地名や注記をみるかぎり、本図作製の資料には西川如見『華夷通商考』（1695）や寺島良安『和漢三才図絵』（1713）などがあったことが想定され、しかも誤謬や重複が幾つか含まれている。とくに興味深いことに、南印度の南方に群島として描かれた^{オランダ}阿蘭陀が位置している。おそらく作者は、地図学・地理学については素人でありながらも、手頃な三国的世界図を板行したものであろう。なお本図は表紙題箋には「大清輿地全図」とする。【3-14】



6-3 「大明九邊万国人跡路程全図」元禄末期（c.1703）

木版・手彩色。122 × 121 cm。

本図は、康熙2年（1663）に清で刊行された「天下九邊万国人跡路程全図」を、日本の梅村弥白がほとんどそのまま翻刻したものである。図の中心には大きく中国が位置し、その北辺に万里の長城、西辺は黄河の源流によって画されている。そして他の地域が中国の周辺を取り巻く形を取っている。北アメリカが右上の隅に、南アメリカが右下に、左にヨーロッパとアフリカが添えられているが、いずれも中国に対して従属的に配置されている。ヨーロッパの世界図に描かれた諸大陸を、分離し、または変形して、中国の伝統的な世界像のなかに組み込んだ図であるといえる。【3-15】

京都大学大学院文学研究科地理学教室

京都帝国大学文科大学に史学科が創設されるに際し、開設委員であった内田銀蔵教授の卓見をもとに、史学地理学第二講座（後の地理学講座）が地理学の独立した講座として開設された。明治40年5月のことであった。

初代教授小川琢治は、地質学出身であったが、着任以前から『地学雑誌』の地理学関係記事の充実に努めており、また漢籍に関する造詣が深く、人文地理学・歴史地理学の研究において幾多の先鞭を付けた。

講座開設時には神戸高等商業学校教授石橋五郎が助教授を兼任し、小川が理科大学地質学鉱物学教室を創設して転出の後、教授として講座を担当した。石橋は史学出身で、時代変遷史的に地理を見る立場を鮮明に、歴史性を重視した。大正13年には雑誌『地理論叢』が発刊され始めた。

石橋の下で助教授であった小牧実繁は、先史地理学が専門であったが、やがて日本地政学の樹立を提唱し、第二次世界大戦下でその立場を推進した。終戦後の昭和20年12月、小牧は職を辞し、室賀信夫助教授と野間三郎講師も同時に辞職した。

教室には専任教官がいなくなり、講座は存亡の危機に瀕したが、東洋史講座の宮崎市定教授が兼任し、その見識に支えられて再建に向かった。昭和22年に織田武雄が助教授に就任し、同25年に教授に昇任して教室の再建が成った。その後地域環境学講座が併設され、さらに改組を経て、現在は大学院地理学講座（大講座）となっている。

地理学教室からは極めて多様な研究者が輩出したが、歴史性を重視する考えは、一つの伝統的な姿勢となっている。戦後長く教室を主宰した織田武雄もまた、地理学史・地図学史が専門であり、同時代に進められた室賀の古地図研究もまた、その一つの流れである。

地理学教室と古地図コレクション

初代の教授として地理学講座を担当した小川琢治は、古地図・地形図等の収集に意を注いだ。多くの古地図を購入する一方、陸軍陸地測量図および地質調査所から地形図・地質図の寄贈を受けた。これにはさらに、教室出身者の寄贈によるものや、古地図研究に不可欠な多くのリプリントの購入も加わって、今日の地理学教室古地図コレクションとなっている。大別すれば、明治以前の日本製の古地図、その時期のヨーロッパやアジア製のもの、明治以後の日本およびアジアの古版地形図及び主題図が主要なものであり、最前者のみで約500点に達する。同コレクションは、研究・教育に活用される一方で、長い間文学部博物館収蔵品の一部として、企画展の形で公開展示をしてきた。京都大学総合博物館の新設に伴い、旧京都大学文学部博物館はその一部として包摂されることとなったが、研究・教育における重要性は変わることがなく、また新たな公開方法が検討されている。

古地図研究の流れ

古地図の魅力とは何だろうか。古地図の収集家や研究者は、古地図に何を見いだすのだろうか。地図学史や歴史地理学、歴史学はこれまで、大きく4つの視点から古地図を扱ってきた。

1. 失われた風景を再現する。例えば、中世荘園の土地利用や家屋の配置を知るために、荘園絵図を読み解く。時代劇の作家が近世江戸の住宅地図（いわゆる切絵図）を参照するのも、同様である。この場合、古地図は、まさしく過去の地図なのであって、過去の世界に近づくための資料として読まれることになる。

2. 古地図の書誌学。古地図は、作製者の実像や作製の経緯が不明であることがしばしばである。それを解き明かすことに情熱を注ぐ研究者は、地道な作業を積み重ねてきた。古地図の収集や、多数の古地図を比較・同定する活動はその第一段階である。その上で、例えば、江戸幕府が数度にわたって作製した「国絵図」の製作過程を解明する仕事や、近世江戸の「遠近道印」と名のる地図作製者の正体を明かす発見が行われてきた。

3. 進化する古地図。現代からみれば、古地図の表現には錯誤や歪みが多々含まれている。そのような不完全な地図が完成された地図へと改良されていく背後に目を注ぐことは、探検家や測量家の活動、測量技術の改良者の存在を掘り起こし、より正確な地図が古い地図を一掃する経緯を評価することへとつながっていく。今回展示した蝦夷地の古絵図やヨーロッパ製日本図は、室賀信夫のそのような関心を踏まえたものである。

4. 世界観、あるいは空間の認識を読み解く。古地図の表現に含まれた歪みや誤りを未熟さとして捉えるのではなく、なぜそのような表現が描かれたのか、どのような世界観や認識に基づくのかを問題とする立場である。この立場からすれば、古地図は、古いがゆえに価値があるのではなく、歪みや誤り、そして独特の記号体系を含むからこそ興味をひく。不完全で幼稚な地図として一蹴せず、注意深く読みといた研究者は、神話的な空間、宗教的な世界観、あるいは優れて政治的な国土像などを、古地図の表現に見いだしてきた。

以上の視点はそれぞれ関連しており、特定の視点のみが重要だというわけではない。しかし、最後の視点が広く受け入れられるようになったのは、比較的最近のことである。没後なお室賀信夫が高く評価される理由としては、今回展示している仏教系世界図の研究を通じて、古地図に潜む世界観を彼が早くから問題としていたことが大きい。

出 展 一 覧

1. 室賀信夫と古地図研究

- 1-1-1 「日本に行われた仏教系世界図について」、地理学史研究 1、1957。海野一隆と共著。(文学部図書室)
- 1-1-2 学位論文「仏教系世界図の地図学史的研究」、1961。
(附属図書館、文/195函/1-2)
- 1-1-3 The Buddhist world map in Japan and its contract with European maps. *Imago Mundi* 16, 1962. 海野一隆と共著。
(文学部図書室)
- 1-1-4 「古地図抄—日本の地図の歩み」、東海大学出版会、1983。
(附属図書館ほか)
- 1-2-1 「地理学史研究会編『地理学史研究』、柳原書店、1957年創刊。(文学部図書室)
- 1-2-2 「日本の古地図」、創元社、1969。南波松太郎・海野一隆と共編。(地理学教室ほか)
- 1-2-3 「日本古地図大成」、講談社、1972。中村拓監修、海野一隆・織田武雄と共編。(地理学教室ほか)
- 1-2-4 「日本古地図大成・世界図編」、講談社、1975。織田武雄・海野一隆と共編。
- 1-3-1 飛騨地方の歴史地理調査ノート 1冊
- 1-3-2 論文「飛騨国の交通系に就いて — 二三の歴史地理学的考察 —」 抜刷
- 1-3-3 論文「並河誠所の子内志に就いて」 2冊
- 1-3-4 論文「章学誠とその方志学」 抜刷
- 1-3-5 草稿「戦争経済遂行上より見たる資源を中心とする研究—英領馬來」 1綴
- 1-3-6 政治地理講義草案 「日本に於ける地政学的思考の展開」 1冊
- 1-3-7 高等学校制度改正にともなう教授要綱原案草稿 1綴
- 1-3-8 高等学校高等科臨時教授要綱 文部省専門学務局
昭和17年3月 文部省訓令第7号別冊
- 1-3-9 草稿「南方圏統治への地政学的試案」 1綴
- 1-3-10 日本地理学史稿 第1草稿 1冊(全3冊のうち)
- 1-3-11 日本地理学史稿 第3草稿 第1冊(全4冊のうち)
- 1-3-12 仏教系世界図資料 1冊
- 1-3-13 カルロス・サンス書簡 1通

2. 蝦夷地の地理像と新訂万国全図

- 2-1 林子平「蝦夷国全図」 天明5年(1785)写本
- 2-2 山口鉄五郎ほか「蝦夷図」 天明6年(1786)
- 2-3 「蝦夷国図 間宮林蔵検地製造」
- 2-4 「北蝦夷地図」
- 2-5 高橋景保「新訂万国全図」 文化7年(1810)
- 2-6 高橋景保「北夷考証」所載 校定図 文化6年(1809)
- 2-7 「間宮林蔵カラフト図写」
- 2-8, 2-9, 2-10 「蝦夷諸島図」3面

3. ヨーロッパ製アジア・日本図

- 3-1 L. Fries: 'Tabvla Sverioris Indiae et Tartariae Majoris' (1541)

- 3-2 Giacomo di Gastaldi: 'IL DISEGNO DELLA TERZA PARTE DELL' ASIA' (1561)
- 3-3 A. Ortelius: 'TARTARIAE SIVE MAGNI CHAMI REGNI typus' (1570)
- 3-4 L. Teisera: 'IAPONIAE INSVLAE DESCRIPTIO' (1595)
- 3-5 Guiljelmus et Johannes Blaeu: 'CHINA Veteribus SINARVM REGIO nunc Incolis TAME'
- 3-6 P. Briet: 'ROYAUME DU IAPON' (c.1650)
- 3-7 I. C. Hommanni: 'Recentissima ASIAE Delineatio'
- 3-8 'PARTIE ORIENTALE de l'Empire DE RUSSE' (1771)
- 3-9 'CARTE DES ISLES KOURILES daprès la Carte Russe' (1779)

J. F. G. de la Pérouse: 'CHART OF DISCOVERIES made in 1787, in the Seas of CHINA and TARTARY' (1798)より

- 3-10 ラ・ペルーズ付図 No.39。
- 3-11 ラ・ペルーズ付図 No.43。
- 3-12 ラ・ペルーズ付図 No.46。
- 3-13 ラ・ペルーズ付図 No.47。
- 3-14 ラ・ペルーズ付図 No.52。
- 3-15 ラ・ペルーズ付図 No.69。
- 3-16, 3-17 ラ・ペルーズ付図 No.59, 60。

4. マテオリッチ系・蘭学系世界図

- 4-1 長久保赤水「地球万国山海輿地全図説」(c.1788)
- 4-2 稲垣子戡「坤輿全図」 享和2年(1802)
- 4-3 小林公峰「万国地球全図説」(c.1852)
- 4-4 「世界万国日本ヨリ海上里数国印王城人物図」(1850以降)
- 4-5 橋本直政「喝蘭新訳地球全図」 寛政8年(1796)
- 4-6 「新訂万国略全図」
- 4-7 半山樵夫「万国地理細図」 嘉永4年(1851)
- 4-8 石黒信由「渡海標の地球略図」 天保4年(1833)
- 4-9 武田簡吾訳 'A Map of the World in Japanese' 文久2年(1862)

5. 仏教系世界図の展開

- 5-1 東大寺大仏蓮弁須弥山図拓本
- 5-2 筒井順昭「天竺絵図」
- 5-3 円通「須弥山儀図」(1813)
- 5-4 「南瞻部洲之図」(c.1698)
- 5-5 浪華子「南瞻部洲万国掌菓之図」 宝永7年(1710)
- 5-6 存統「世界大相図」 文政4年(1821)
- 5-7 存統「天竺輿地図」 文政11年(1828)
- 5-8 花坊兵蔵「南閩浮提諸国集覧」 延享元年(1744)
- 5-9 「万国掌菓之図」

6. 中国系世界図

- 6-1 「唐絵図」
- 6-2 青苔園「清朝一統之図」 天保6年(1835)
- 6-3 「大明九辺万国人跡路程全図」 元禄末期(c.1703)

あとがき

本図録は平成10年度京都大学附属図書館秋季展示会「日本の西方・日本の北方 ― 古地図が示す世界認識 ― 京都大学附属図書館所蔵室賀コレクション古地図展」の出陳図録として編集したものである。解説文の執筆は京都大学大学院文学研究科地理学教室の金田章裕教授ならびに同教室大学院生の米家泰作氏にお願いした。また「1-3 室賀コレクション」の解説では京都大学総合人間学部の松田清教授の手を煩わした。ここに記して謝意を表するものである。

なお、編集とレイアウトは附属図書館の田中耕二が担当した。

【記念講演】

- ▶ 演 題：洋学からみた室賀コレクション
- ▶ 講 師：松田 清氏（総合人間学部教授）
- ▶ 日 時：1998年11月6日（金） 午後2時～4時
- ▶ 会 場：京都大学附属図書館 大会議室（4階）

日本の西方・日本の北方 ― 古地図が示す世界認識 ― 京都大学附属図書館所蔵室賀コレクション古地図展

1998年10月31日

編集・発行 京都大学附属図書館
〒606-8501京都市左京区吉田本町

印 刷 大森印刷
〒612-8006京都市伏見区桃山町大島27-5
